

●国際連合大学 2014-2015 年国際教育交流事業●

中国政府日本教職員招へいプログラム 実施報告

北京市・広西チワン族自治区・上海市

2015年5月24日(日) — 5月31日(日)

国際連合大学 [UNU]
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター[ACCU]

2014-2015 年国際教育交流事業●

中国政府日本教職員招へいプログラム 実施報告

北京市・広西チワン族自治区・上海市

2015年5月24日(日) — 5月31日(日)

はじめに	2
1. 実施概要	4
2. 表敬訪問	8
3. 学校訪問	14
4. 歴史と文化訪問	26
5. 成果と今後への活用	28

資料	40
----	----

(写真、実施要項、日程表、参加者リスト・関係者リスト、過去のプログラム実績)

国際連合大学

[UNU]

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター[ACCU]

はじめに

国際連合大学(UNU:United Nations University)は、アジア太平洋地域の教職員や教育分野の専門家等の資質の向上と相互理解の促進を目的として、2002 年より日本政府の拠出金をもとに「日本国際教育交流プロジェクト」を実施してきました。国際連合大学はこの一環として、交流事業を公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター(ACCU:Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO)へ委託し、広く展開しています。

2002 年からはじまった「国際教育交流事業」では中国教職員の招へいプログラムを実施しており、これまでに延べ 1,490 名の中国教職員を日本に招へいしてきました。

翌 2003 年からは上記プログラムと対をなすものとして、毎年 10 名程度の日本教職員を中国へ派遣してきました。これらの交流事業の成果が中国政府に評価され、日中国交正常化 35 周年を記念する 2007 年からは中国の教育部による招へいプログラムとして、参加人数を倍増し、日中教職員相互交流のさらなる発展を目指して実施されるようになりました。

このたびの「中国政府日本教職員招へいプログラム」は、2015 年 5 月 24 日から 5 月 31 日に実施され、過去 2 年間に中国教職員の受け入れにご協力いただいた自治体や学校の教職員、次期受け入れを予定している自治体や学校の教職員等、計 25 名が参加しました。

参加者は北京市で中国教育部による同国の教育事

情や制度について説明を受けたのち、広西チワン族自治区と上海市での教育行政機関、学校および教育文化施設等を通して、中国における教育の現状と課題、訪問都市の教育の特徴、及び両国における教育課題の共通点と相違点について学ぶとともに、中国の教職員、児童生徒との交流を図ることができました。

このたびの訪問が、中国の教育や文化に対する参加教職員の理解を深めることはもとより、帰国後の諸活動を通じて日中の教員間、学校間の交流のいっそうの発展に役立つよう願ってやみません。

最後に、このプログラムにご支援とご協力をいただきました、中国教育部、文部科学省、外務省、及び、広西チワン族自治区教育庁、桂林市教育局、訪問先の各学校をはじめ、関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

2015年7月

国際連合大学

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター

1.

実施概要

今回の国際教育交流事業中国政府日本教職員招へいプログラムは、2015年5月24日から5月31日の8日間にわたって実施された。

今回のプログラムでは、中国教育部と広西チワン族自治区教育厅、桂林市教育局の協力を得て、広西チワン族自治区桂林市内で3校、上海市内で1校の学校訪問をした。各訪問地では、中国教育部表敬訪問、広西チワン族自治区教育厅表敬訪問、学校訪問に加え、教育関係者との意見交換や文化施設等の見学を通じて教育交流を行い、そこから多くを学び取り帰国した。

今回の訪問団の参加者の構成は、以下のとおりである。2014年10月から11月に実施された中国教職員招へいプログラムの受入自治体である東京都多摩市教育委員会、熊本県荒尾市教育委員会、長崎県長崎市教育委員会から選出された教職員、同プログラムにおける東京近郊の訪問学校から選出された教職員、そして2013年秋の中国教職員訪日の際の訪問学校や日中間の教職員交流に実績のある自治体を加えて、合計20名の参加となった。このほか、国際連合大学と文部科学省の代表者、およびユネスコ・アジア文化センター職員の計5名が同行し、合計25名が日本教職員訪問団として中国へ向かった。なお、今回の日本教職員訪問団の団長は、和光小学校校長の北山ひと美氏、副団長は荒川区立尾久宮前小学校校長の伊藤英夫氏である。

出発前日の5月23日、参加者らは宿泊先ホテルの会議室に集合し、事前オリエンテーションを行った。オリエンテーションでは、国際連合大学大学院事務局長の岩佐敬昭氏、文部科学省初等中等教育局教育課程課課長補佐の美濃亮氏、公益財団法人ユネスコ・アジア文化セ

ンター人物交流部部長の米島百合子があいさつをした。

つづいて文部科学省生涯学習政策局参事官付専門職の新井聡氏より、中国の教育概要、近年の教育改革の動向についてなどの講義があった。参加者がそこで得た知識は、中国訪問中、現地での見聞を深めるための基礎知識として大いに役立つものとなった。

その後、前年度プログラム参加者を代表して、大田区立大森第六中学校教諭の町田恵理子氏と東京都立杉並総合高等学校主任教諭の藤野明彦氏より、前年度の経験に基づいた見どころやアドバイスをまとめた発表がなされた。今回の参加者たちは熱心に耳を傾け、翌日からの訪中のイメージを膨らませていた。

また、情報共有会の時間も設けられ、プログラム中の役割分担等について話し合った。

プログラム第1日目の5月24日の早朝、訪問団25名は羽田空港から北京首都国際空港に向けて出発した。空港では、中国教育国際交流協会職業教育訓練部の王鉄輝(WANG Tiehui)氏が出迎えてくれた。王鉄輝氏と合流した訪問団一行は、専用バスで昼食会場へ向かい、その後故宮博物院と天安門を見学した。

明・清朝の歴代皇帝が暮らした壮麗な宮殿建築を今に伝える故宮博物院と、歴史転換の舞台であり現代中国を象徴する場所となった天安門に、参加者たちは中国の歴史の重みとスケールの大きさを肌で感じた。

第2日目の5月25日午前、中国教育部への表敬訪問を行った。中国教育部では、別件で一時帰国中であった中華人民共和国駐日本国大使館の白剛(BAI Gang)公使参事官も駆けつけ、歓迎の挨拶をされた。その後、国際合作交流司の副司長の陳盈暉(CHEN Yinghui)氏により日中の教育交流について、また基礎教育一司総合処の副処長の榮雷(RONG Lei)氏より中国の基礎教育について、それぞれ詳しく説明を受けた。国際合作交流司からは他に顧秋利(GU Qiuli)氏ほか3名も出席され、顧氏が通訳を務めた。陳、榮両氏の説明の後、質疑応答の時間が設けられた。日本教職員訪問団からの質問の他、中国側からも日本の教育事情について質問が飛び、お互いに相手国の教育制度や方針について情報を得、相違点を理解することができた。



この日の中国教育部主催の歓迎昼食会には、表敬訪問で対応頂いた陳氏、顧氏、王禹耕(WANG Yugeng)氏、馬力(MA Li)氏らが主催側として出席し、訪問団と歓談し交流した。

昼食後、訪問団一行は北京市南部にある天壇を見学した。天壇は明、清代の皇帝が五穀豊穡を願って祭祀を行った場所で、前日に見学した故宮よりさらに広大な公園である。ガイドの案内を聞きながら見学したほか、自由時間も設けられ、各自思い思いに散策した。

同日夜には北京を発ち、空路で広西チワン族自治区南寧に向かった。

第3日目の5月26日から28日にかけて、一行は広西チワン族自治区の行政機関と学校を訪問した。広西チワン族自治区は中国南部に位置し、ベトナムと国境を接する。中国最大の少数民族であるチワン族をはじめ、多数の少数民族が暮らす地域でもある。

26日午前、訪問団は首府・南寧市にある広西チワン族自治区教育庁を表敬訪問した。まず、教育庁を代表して副庁長の蔡昌卓(CAI Changzhuo)氏より歓迎の挨拶があった。農村の教育水準向上や民族教育のあり方など、地域特有の取組みや課題にも言及があり、訪問団

《中国の教育に関する基礎データ》

◆中国の総人口 136,072 万人

	学校数	生徒数	教員数
小学(小学校)	213,500	93,606,000	5,585,000
初中(中学校)	52,800	44,401,000	3,481,000
高中(普通高等学校)	13,400	24,359,000	1,629,000
特別支援学校	1,933	368,000	52,000

* 2013 年度データ。

出典：文部科学省「諸外国の教育動向 2014 年度版」

◆訪問都市の人口と面積

北京市(2013 年統計)

面積	16,410.54 km ²
人口	2,114 万 8 千人

広西チワン族自治区(2013 年統計)

面積	23,6700.00 km ²
人口	5,240 万人

出典：JETRO 中国エリア別情報、

在広州日本国総領事館 管轄区域情報

は中国における地方の教育行政について理解を深めた。

日本側からは伊藤副団長が今回の歓迎に対する感謝と今後の学校訪問への期待を込めて挨拶をし、続く質疑応答では教員の待遇や少数民族の教育等について質問が出された。

昼食後、一行は翌日からの学校訪問のために桂林市に向かった。南寧市からバスに揺られること 6 時間、無事桂林市に到着した一行を桂林市教育局の面々が出迎えてくれ、夜には歓迎夕食会が開催された。局長の鍾平(ZHONG Ping)氏の挨拶では、姉妹都市提携を結ぶ熊本市との交流について紹介があり、日中の相互理解と良好な関係発展への意欲の高さがうかがえた。一行は名物料理に舌鼓を打ち、和やかなひとときを過ごした。

第 4 日目となる 5 月 27 日朝、一行は桂林観光のハイライトである漓江下りを体験した。遊覧船から眺める幻想的な風景は水墨画さながらで、中国の豊かな自然とゆったりとした時の流れを感じながら、風光明媚な景色を堪能した。

午後は今回最初の訪問校である桂林市逸仙中学を訪れた。一行が訪問したのは同校の高級中学で、日本の高等学校にあたり、広西チワン族自治区のモデル校に認定されている。孫文の思想を受け継いで創立された学校で、校名の「逸仙」は孫文の別名である。

校門をくぐり、きちんと整列した礼儀正しい生徒たちに出迎えられた訪問団一行は、万成林(WAN Chenglin)校長および北山団長の挨拶、記念品交換、質疑応答の後、校内を見学した。訪問団一行はレベルの高い授業内容や生徒たちの意欲的な学習姿勢に驚くと同時に感銘を受け、熱心に授業を参観した。その他、図書館などの施設見学、美術やスポーツのクラブ活動も見学し、生徒たちの学校生活を垣間見ることができた。校庭でのクラブ活動見学では、日本教職員チームが生徒たちとムカデ競争のようなチワン族の伝統的スポーツで対決し、言葉の違いや世代の差を越えて白熱する一幕もあった。

逸仙中学からホテルへの帰路、バス車中で情報共有会を行った。参加者たちがそれぞれの視点で見聞きした内容や感想を共有することで、新たな気づきや理解の深化につながった。

第 5 日目の 5 月 28 日午前、一行は二校目となる桂林市榕湖小学を訪問した。学校のシンボルである榕樹(ガジュマルの木)に児童らの成長をなぞらせ、強く生命力にあふれた子どもを育てることを教育方針としている。優

秀なクラスや児童の功績を掲示して全校に知らせることにより、本人の自信を育むと同時に、他の児童のやる気や努力も引き出す好循環が生まれているという。

到着後、訪問団一行は全校あげての盛大な歓迎を受けた。全校児童による規律正しい体操には圧倒されるものがあった。贾玉荣(JIA Yurong)校長の挨拶を受けて、訪問団を代表して長沼町立長沼舞鶴小学校石丸力校長が挨拶をし、その後キャンパスツアーが行われた。授業の様子や交通安全授業を行う専用公園、家庭科室などを見学した。校庭では子どもたちがバンド演奏やチワン族の民族舞踊を披露してくれた。訪問団も歌を披露したり、子どもたちと輪になって踊ったりして、交流を深めることができた。最後に記念品を交換し、榕湖小学を後にした。

その日の午後、一行は三校目の桂林市聾哑学校を訪問した。学校では訪問団は 2 グループに分かれて授業や教室・設備などの見学をした。同校は全寮制であるため、生徒たちの寄宿舎も見学した。

同校は、卒業後の就職にも力を入れており、調理、裁縫、理容補助、ホテルのベッドメイキングなど、自立を前提とした職業訓練を行っている。生徒たちのハンディをもちもしい前向きな姿勢と教職員の手厚い支援に、訪問団の多くが胸を打たれた。歓迎会では生徒たちによる見事なダンスが披露され、「聞くこと以外は何でもできる」という教育方針が、子どもたちの自信に満ちた表情に表れていた。さらに、教職員によるダンスが披露されたり、桂林市教育局長が訪問団に合わせて来校したりするなど、この日のために相当の準備をし、もてなされていることが伝わる内容であった。

この日も、帰りの車中で情報共有会を行った。二つの学校の視察を終えた参加者たちからは、興奮冷めやらぬ様子で積極的に発言がなされ、各自の収穫を共有した。

第 6 日目の 5 月 29 日早朝、訪問団は最後の目的地、上海へと飛び立った。一旦ホテルに立ち寄り、昼食をとった後、午後は四校目の訪問校となる上海市進才実験中学を訪れた。同校は上海市浦東新区の国際色豊かなエリアに位置し、いわゆるエリート教育を推進している中学校である。

まず、楊龍(YANG Long)校長より歓迎の挨拶と学校の特徴の説明があった。つづいて日本側からは札幌市立北辰中学校宇留間準校長が挨拶に立ち、日中の教育交流発展にかける意気込みを語った。

施設見学の後、2 グループに分かれ、それぞれ教員との交流、または生徒との交流を行った。教員との

交流グループでは、同校の特色であるエリート教育や芸術・スポーツに対する取組みなどに関心が集まり、訪問団から様々な質問が出された。一方、生徒との交流グループでは、日本語クラスの生徒たちが訪問団の質問に答え、将来の夢などについて語った。

それぞれの交流後、再び合流した一行は、授業参観に加えて、部活動やオーケストラの練習、生徒の美術作品の展示などを見学し、記念撮影をして訪問を終了した。

恒例の帰路車中での情報共有会では、教員、生徒との交流で二手に分かれたグループからそれぞれの交流の様子を述べ合い、情報共有をした。

同校を後にした一行は、外灘(バンド)を散策し、古き良き租界時代の建築と対岸の高層ビル群の対照的な町並みを楽しんだ。

第7日目は上海の文化施設や庭園を見学した。

午前中は2010年の上海万博時の建物を利用した大型美術館、中華芸術宮へ向かった。迫力満点のCG映像作品をはじめ、中国の近現代美術など数多くの作品が展示されており、見ごたえのある美術館であった。

午後は膨大な収蔵数を誇る上海博物館で中国古代の文物を鑑賞し、その後、上海屈指の歴史的庭園である豫園を見学した。散策したり、土産物を買ったり、集合時間まで各自自由に過ごした。

最終日の5月31日早朝、参加者たちは上海浦東空港に向かい、空港にて解散、各帰国地に合わせて成田、福岡の各空港へ向かって帰国の途に着いた。

2.

表敬訪問

中国教育部 [北京市]

広西チワン族自治区教育厅 [南寧市]

訪問団は首都の北京市にある中国教育部と広西チワン族自治区の首府・南寧市にある広西チワン族自治区教育厅にて表敬訪問をした。教育部では中国の教育概要と教育分野での日中交流の取り組み等について説明を受けた。教育厅では少数民族教育などの地方特有の教育方針にも言及があり、中国の教育についてさまざまな側面から理解を深めることができた。

中国教育部

[北京市] 5月25日(月)

中国教育部は1998年3月に旧国家教育委員会が改称されて置かれた中国の中央政府の組織である。教育全般を総括し、日本の文部科学省にあたる。教育の基本方針・政策、諸基準を制定し、中央各部委員会および地方を指導する。

北京到着翌日の5月25日、日本教職員訪問団一行は中国教育部で表敬訪問を行った。

中国教育部では、臨時に帰国されていた中華人民共和国駐日本国大使館 公使参事官 白剛(BAI Gang)氏より歓迎の挨拶があり、その後、国際合作交流司副司長 陳盈暉(CHEN Yinghui)氏から日中交流の状況について説明があった。中国の基礎教育については、基礎教育一司総合処副処長 榮雷(RONG Lei)氏より詳しい説明があり、質疑

応答があった。また国際合作交流司からは、顧秋利(GU Qiuli)氏も出席され、通訳を務めた。また、日本側からは、訪中団に加えて、在中国日本国大使館参事官 横井理夫氏も出席された。

①陳盈暉氏の説明:

日中は隣国であり教育分野の交流は、時間も長く豊かな成果を上げている。今年も、3年前2012年から始まった日中教育交流5ヶ年計画の4年目にあたるとは、各分野の交流は順調に進められている。主に5つについて説明する。

1. 基礎教育教職員交流

本事業を含む教職員交流は、2002年からスタートし、中国からは3,300名を派遣、日本からは2,300名程を受け入れている。両国の基礎教育の現状を理解する上で重要な事業と位置づけている。教員間交流を大切にしているが、将来的には、学校間交流などより良いものに発展してほしいと願っている。

2. 青少年交流

外務省と協力し、1998年から数えるとこれまでに中国から1万人もの高校生を派遣しており、一番大きな交流である。今年も1,500名を派遣する予定である。

3. 留学生交流

2014年現在、中国にいる日本の留学生は15,057名、中国からは日本へは106,026名が留学している。両国間の留学生が益々増えることを期待している。

4. 言語教育

日本には、2005年に孔子学院を初めて設立し、現在は13カ所となっている。7カ所の孔子学堂もあり、昨年は日本で中国語検定 HSK[中国政府公認資格]に10万人が挑戦している。また、中国の大学では、日本語を学ぶ学生が英語に次いで多い。500の日本語学科がある。

5. 日中韓の教育交流

三国の大学交流。大学の競争力をアップし、アジアの発展に資する人材を育成することを目指している。将来的には、学生の学校間の移動を自由にしたい。

* 北山団長より記念品贈呈(陳盈暉氏は別の会議があるため退席)

②栄氏の説明:

中国の基礎教育は、日本と似ているが特色のある部分もある。

中国の基礎教育について6つに分けて説明する。

1. 学制について

中国の基礎教育には、幼児教育・初等教育(小学校6年)・中等教育(中学校3年、高等学校3年)が含まれている。義務教育は、小学校・中学校の9年間で日本と同じである。

中国は、1986年に義務教育法が公布され25年をかけ2011年に無料の義務教育が全面的に普及した。6歳で入学し、入学時期は秋である。小・中学校は、2学期制をとっている。

2. 基礎教育の管理体制

国務院の指導のもと省レベルで管理している。また、中国の義務教育の経費は、国と地方で負担し省レベルで実施し管理している。学籍は、全国で電子データによる統一管理をしている。1人1学籍で番号は学生の身分証明番号となっている。

3. 学校の設置

各行政地域の児童・生徒数と分布で計画的に設置している。必要に応じて寄宿学校の設置や、目や耳の不自由な学生のための特別支援学校・学級の設置も行っている。中国は、校長責任制を取っており、校長は国の定める基準を満たす者とする。

4. 教師について

中国は免許制度を実施しており、有資格者を省が招へいし、学校が任用している。職務制度があり、初級・中級・高級の3つの段階がある。中国は、貧困な農村に勤務する教師に補助を出している。

5. カリキュラムについて

国がカリキュラムの規準を作成し、地方と学校で授業を計画している。教科書は、出版社より申請のあった教科書から国が選定し、その中から省で選ぶことになっている。

6. 監督の責任

中国では省レベルで監督の機構を設置し、基礎教育の法律の実行と教育の質について社会に公開する。1学期は35週と定められており、2週間は学校で決めることができる。

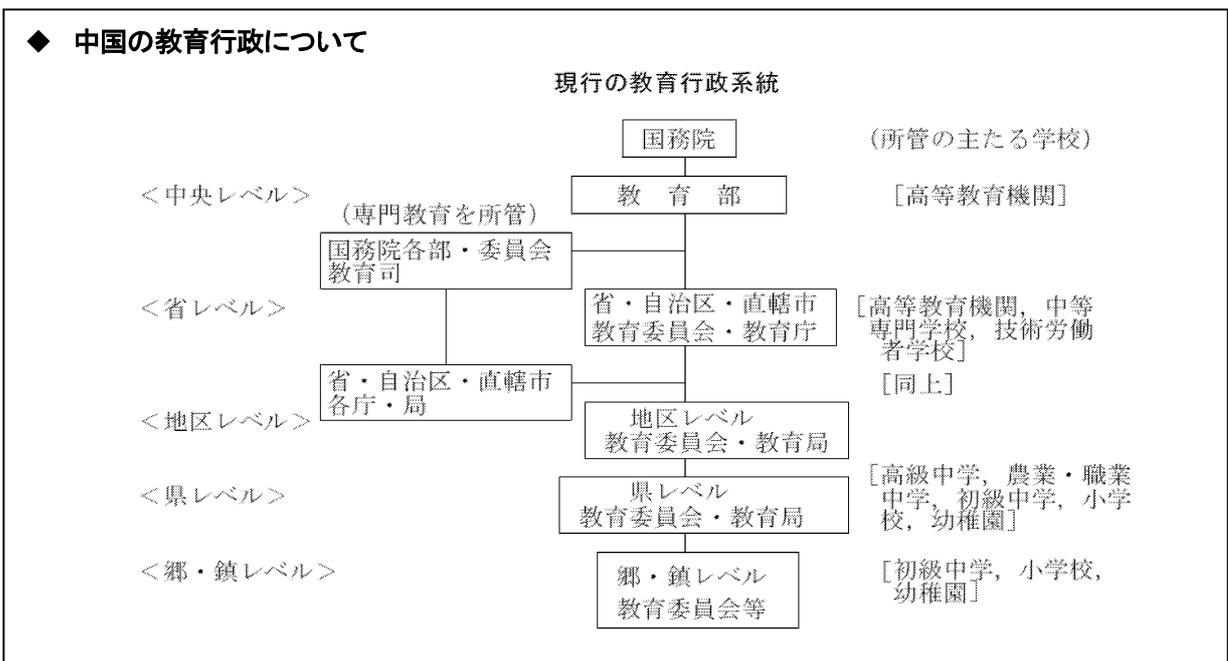
中国の基礎教育の規模は、在学する学生は2億人、教師は1,200万人、義務教育は全面的に普及し、幼児教育は67.5%、高等学校への入学率は86%である。

質疑応答:

Q. 私立の学校はどのくらいあるのか? また、助成金は?

A. 私立学校を中国語では、「民弁学校」と言い、基礎教育段階では全体の5%である。中国は、民弁教育を支持しており、民弁教育促進法により経費の補助も行っている。

Q. 確か10年前の高等学校への進学率は今の半分くらいだったと記憶している。中国が教育・人



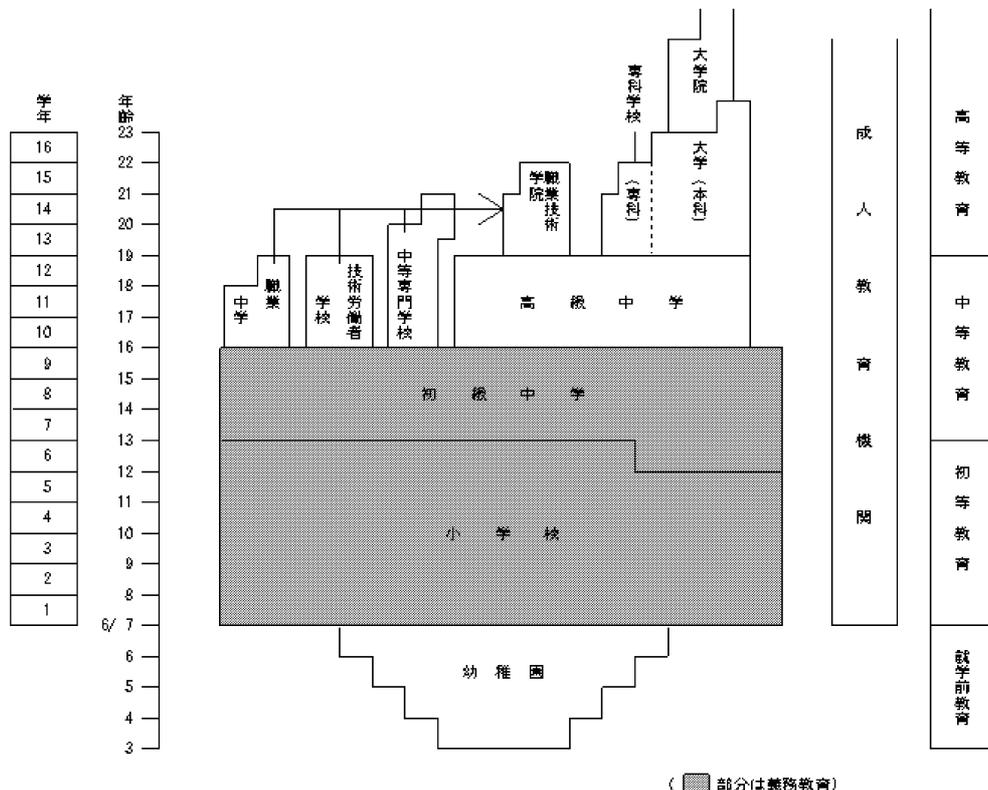
材育成に力を入れていることを強く感じる。さて、説明にあった全国統一の学籍管理はどのような方法でどのような情報を管理しているのか？

- A. 地域が広く教育全体の質のアップは難しいが、急激な発展は優れたことと捉えている。中国は、学籍の情報化を重視しており小・中学校全ての学生の学籍が情報管理システムにまとめられている。内容としては、生年月日や出生地等の個人情報や学業成績であるが、将来的には素行評価なども入るかもしれない。
- Q. 高校から大学へ進学する時にも活用されているのか？
- A. 中国の大学入試の改革にもなっており将来的には普段の成績も参考にしたいと考えている。
- Q. 日本にも学籍のシステムはあるのか？
- A. 学籍は、学校で管理している。電子化も検討されているが記憶媒体が年々進化していることからどのような媒体で保存するのか課題となっている。
- Q. 学生が転校するときは学籍も移動するのか？
- A. 学校へ学生と一緒に紙媒体で移動する。保存期間も20年と定められている。

Q. 日本では学校運営協議会やコミュニティスクールなどが学校を外部から評価することがあるが、中国ではどのようにしているのか？

- A. 地域の声を聴くようにしている。また、経験豊かな校長や専門家が地域の教育についてアドバイスをしている。
- Q. 中国では、グローバル化に向けた人材をどのように育成しているのか？
- A. いくつかの特色のある学校で実施している。外国語教育の面でいうと、外国語の授業を実施する、または自分の興味ある外国語を学習するといったことが実施されている。外国から招いた教師が、リスニングやスピーキングを担当するなどしている。
- Q. 中国では小学校から英語教育を始めているが、義務教育終了でどの程度のレベルに到達しているのか？
- A. 具体的には学校で訊いてほしい。
- Q. 日本では文科省が10年ぐらいで教育の基準を見直すが、中国ではどうなのか？また、教師に対する研修はどうなっているのか？
- A. 中国は、基礎教育の教師のトレーニングを国

◆ 中国の教育系統図



が行っている。5年間で全ての教師に実施する予定である。

Q. 教科書は、どのように選定されているのか？また教科書の電子化は、どのようになっているのか？

A. 国の審査委員会が査定し、各地域で選んでいる。また、優秀な教師が動画配信を行っている。

Q. 日本の小学校の就学年齢について。

A. 4月で6歳になっていなければ小学校に入学できないことを説明。

Q. 日本では、初等中等教育の学校の設置の基準は、どうなっているか？

A. 日本では、各県市町村の教育委員会が学校を設立している。

Q. もう少し具体的に教えてほしい。

A. 私の勤めている東京都荒川区で言うと、小学校は児童数30人の学校から1,200人の学校までである。1,000人を超える学校は、学区内にマンションができたためである。その場合は、プレハブ校舎をつくり、学校は一つのみである。

Q. 日本は、細長い国であり、遠隔地の教師は、どのように赴任しているか？

A. 日本は、教師は都道府県ごとの採用であり、県内の異動である。遠隔地手当も支給される。

A. 私は、島の小学校にもいたことがある。児童数10人の学校で学校の規模は、他の学校とは変わらない。特別手当がつくので給料は、上がる。初任者など若い教師は、島に行く可能性がある。荒川区の場合、校長も3～5年で異動する。

Q. 日本の学校の修学旅行は、どのようになっているのか？

A. 私の勤めている筑波大学附属中学校は、修学旅行の発祥の学校である。明治時代にその土地について学習し、子どもが教師の指導のもとにリーダー性を養うことを目的にして始められた。京都、奈良などの観光地に行き、伝統や文化を学んでいる。また、国際化に伴い、海外修学旅行を実施している学校もある。

A. 私の勤めている私立の市川学園では、中学3年生でシンガポール修学旅行を実施している。現地では英語で交流、もしくは日本語を学んでいる生徒とは日本語で交流する。またマレーシアを1日訪れ、手でご飯を食べる経験やトイレ

の使い方などの異文化体験もする。

(石丸 力)

《参加者の感想》

古閑 悦子・・・・・・・・中国教育部を訪問することで、日中の互いの教育に関する真摯な取組の状況を知った。日中間の教職員や児童生徒・学生の交流が友好的に行われてきたことやこれらの取組を重要な取組と捉えていることも知った。また、中国が、教育の均等化・近代化を図り、人力の強い国を目指して改革を進めてきていることも知った。

日本の10倍ほどもいる教職員や児童生徒の教育には、苦労もあり、特に教師の質の向上を図っていることは日本と同じ状況である。国際社会で活躍するグローバルリーダーの育成について基礎教育から重視し、国内外の人材を活用しながら各地で育成を図っていることは、今日の中国の世界での躍進ぶりから実感することができた。

今後も、民間レベルでの交流が主となり互いのよさを認め、互いに発展していく関係を願い、自分も努力していきたい。

笹尾 弘之・・・・・・・・中国教育部表敬訪問では、「中国の教育制度および教育課題への理解を深める」という目的に対する成果があった。

特に印象に残ったことは2つある。1つ目は、都市部と地方との格差問題だ。日本は都道府県別の学力調査でもわかる通り、地方と都市部の教育格差はそれほど問題になっていない。しかし、中国では教育部が重点課題に挙げるほど深刻な問題となっている。その理由は、都市部は義務教育が早い段階から普及したのに対して、地方は近年になってから普及率が100%になったことと考えられる。この背景には、所得の高い家庭が質の高い教育を受けることが出来ることあるだろう。経済だけでなく、教育にも地域間格差を是正することが中国の課題ということを理解した。

2つ目は、国内全生徒の学籍データの管理である。内容は基本的な個人情報と学力成績と書いていたが、日本には無いシステムで非常に驚いた。私のイメージでは、住民基本台帳ネットワークシステムのようなものだろうか。もし同じであったら、住基ネット導入で問題になっている情報漏えいやデ

一タ改ざんなどの対策はどうなっているのかを質問すべきだった。国内にいる2億人以上の生徒データを高校・大学入学試験で適切・公平に利用できるならば、素晴らしいシステムになると思う。日本では紙ベースで学籍データを残しているが、中国のようにネットワークで共有できれば教育の可能性が広がっていくだろう。教育の中身だけでなく、情報管理という面も日本は他国に学ばなければならぬと感じた。

以上2点が、中国教育部表敬訪問で私を感じた所見である。

宇留間 準・・・・・・・・中国教育の全体像に触れる貴重な機会だった。政府が企図する教育政策が実行段階に入り、標準化の完遂に向けて多くの困難に遭遇しながら、日中交流にもヒントを模索している状況が垣間見られた。

石丸 力・・・・・・・・義務教育段階の児童生徒1億300万人を抱える中国において、義務教育法が施行されわずか25年で無料の義務教育が完全実施されていることに驚いた。また、日本に比べ小学校段階から広く教科担任制が普及していることや、小学3年生から「外国語科目」が設置されているなど学ぶべき事も多かった。

小林 美礼・・・・・・・・中国も我が国と同様にグローバル人材の育成を重視しており、その具体策を伺うことができた。英語教育の質に課題があること、第2外国語を学ぶチャンスがあること、外国人教師を招へいし、外国の考え方の理解の促進を重視していることなど。我が国の取り組みや課題と共通である印象を受けた。また、教科書は国レベルで選定委員会チェックし、その後各地方で選んでいる。

教師の資質向上のため、教師トレーニングの計画が実行されていることも知った。また優秀な教師の授業をデータ化し、地方の学校に提供しているなど、参考になることもあった。教員を初級・中級・高級の3種に分け、経験値と業績によって差別化していることは興味深いと感じた。

島岡 恵一・・・・・・・・中華人民共和国駐日本国大使館参事官の白剛さんの参加には、非常に驚いた。日中教育交流のみならず、現在の日

中情勢を念頭に置いたその行動による友好のメッセージを十分過ぎるくらいに感じた。また教育部の説明により、中国全体の「教育の平準化」を目指していることを知ったのは大きい。以後の日程をこなしていくにつれ、その重要性を理解できるようになっていった。その意味で、この2点についての理解は私にとってのキーポイントとなっていく。

薄葉 みわ子・・・・・・・・中国の教育についての基本的な情報を丁寧に教えて下さり、その後の学校訪問の参考になった。英語教育に関しての説明も受けたが、クラスサイズなど、EFLの環境でどのように効果的に英語を使えるようにさせるかは共通課題としてあるようだった。

広西チワン族自治区 教育庁

[南寧市] 5月26日(火)

広西チワン族自治区は人口5,500万人、チワン族をはじめ12の少数民族がいる。

小学校11,008校、中学校1,843校、高校445校、特別支援学校42校。小学生431万人、中学生115万人、高校生83万人、特別支援学校3万人。基礎教育を重視し、130億円を投入している。2014年で義務教育の就学率は90%、高校は82%。就学率は向上している。

1. 広西チワン族自治区教育庁副庁長 蔡昌卓 (CAI Changzhuo) 氏あいさつ

皆様に会えて嬉しい。日本には好感を持ち文化に強い印象をもっている。基礎教育を重視し、受験勉強だけにとらわれるのではなく、資質を育てる教育を行いたい。教師の育成と待遇改善にも力を入れている。農村地域では教師の住宅の改修を行っている。少数民族の文化を継承できる教師にすることが課題。桂林師範大学は、日本の大学とは提携し、姉妹校となっている。桂林市と熊本市は、姉妹都市である。国同士の誤解は、交流が少ないため生じる。互いに理解し、親しい関係になるのが

一番大事である。両国の子どもたちの交流を大切にしていきたい。

2. 伊藤英夫副団長あいさつ

広西チワン族自治区に招いていただきありがとうございます。この日を楽しみにしていた。昨日夕べ、北京から到着した。昨日、教育部訪問でたくさんのことを学んだ。故宫博物館、天壇と見学をし、広さと長さに感動した。北京はバラ、こちらはハイビスカスが綺麗だ。北京ではたくさん人がひしめき合っ、交通事故を起こさないのは、すごいと思った。

本日から3日間、高校、小学校、特別支援学校の訪問を楽しみにしている。子どもは、様々な教員が来ている。視察を楽しみにして、写真を撮って日中友好の懸け橋となるよう、交流したい。

3. 懇談

Q. 先生の給料は一般公務員より高いのか。社会的地位は。夏休みはあるのか。

A. 改革前は教師の希望者は少なかった。9月10日を教師の日とし力を入れて給料も高くなった。現地の公務員と給料は一緒。夏・冬休みは仕事をしない。旅行などをやる。

Q. 初級から中級、高級と上がっていく場合、試験があるのか。

A. 初級で3年から5年で昇格し、中級、高級となっていく。高級になると給料が高い。基準があり、年数、仕事量、業績、評価で試験はない。評価は厳しくなかったが、今は厳しい。校長は、高級教員であることが条件である。

Q. 少数民族に対しての具体策は、また、先生の研修は。

A. 平等で差別なく扱う。ただし入学試験では少数民族の生徒には加点がある。教師が民族教育について共有できるようにしている。民族教育コースもある。

Q. 少数民族のいる学校、教師について

A. 教師には中央から手当が出る。少し多めに支給されるケースがある。

Q. 民族独自の言語の教育について

A. 共通語を使用して授業を行う。同じテキストで差別なく同じようにしている。

Q. チワン族の文字について

A. ほとんど使わない。話されてきたが、書くことは出来ない。ある地区ではチワン語が学ばれて

いる。

Q. 漢民族、チワン族間の結婚について

A. ウマがあえば(笑い)

Q. 教師は副業できるのか。

A. 忙しいが、副業をしている教師もいる。管理職の副業は、禁止されている。

(清水 一徳)

《参加者の感想》

笹尾 弘之・・・・・・・・・・広西チワン族自治区教育庁表敬訪問では、「中国の文化全般への理解を深める」という目的に対する成果があった。

私は地理の教員として、中学生や高校生に対して中国の少数民族についての授業を行っている。しかし、チワン族の文化(言語や宗教・食生活など)について触れる機会はほとんどない。チベット族やウイグル族など、特徴のある少数民族についての文化が多い。なぜチワン族についての情報は少ないのか、その理由は教育庁での説明で理解できた。

少数民族の教育について、学校ではどのように行っているのかという質問に対し、「学校では民族は関係なく平等に扱い、標準語の教科書を使用している。さらに言語はほぼ使用しない」ということだった。私の認識とは違う新たな事実を知り、非常に驚いた。アメリカやオーストラリアのような多文化主義ではない考え方の中国の統一性が関係しているのだろうか。地理教員として、生徒にもこのことを考えさせたいと思う。

小林 美礼・・・・・・・・・・地方の教育庁においても諸外国との交流を大切に考えていることが良くわかった。また、基礎教育を重視しており、少数民族への平等な教育を強調していたのが印象的である。それだけ多民族国家の抱える諸問題や格差の問題があるのではないかと想像した。文化大革命以前は、教師は人気のない職業であったが、国家の教師を重視する政策が影響し、今では現地の公務員と同じ待遇になっていることを聞き、中国が教育に力を入れていることが分かった。管理職以外の教員の副業が認められていることは意外であった。教員のメンタルヘルスの問題があることを聞き、これは日本と同じであると思った。

3.

学校訪問

桂林市逸仙中学
 桂林市榕湖小学
 桂林市聾哑学校
 上海市進才実験中学

桂林市逸仙中学 (高等学校)

[桂林市] 5月27日(水)

学校長: 万成林 (WAN Chenglin)
 設立年: 1938年7月創立
 児童・生徒数: 約1,522名 / 教員数: 約140名

日本と友好関係の深い孫文(「逸仙」は号)の教え・意思を受け継ぎ創立された歴史と伝統のある学校である。中学・高校の2キャンパスを持ち、広西チワン族自治区の模範校として恵まれた施設を有する。緑化・環境美化にも優れ、上級教師を多数採用しているモデル校でもある。外部との交流実績も多い。

1. 万成林学校長あいさつ
2. 北山団長あいさつ
3. 記念品交換

4. 交流
 - Q. 高校卒業後の進路は?
 - A. 20%程度が広西チワン族自治区外へ進学する。
 - Q. 副校長の人数と役割分担は?
 - A. 普通は3名だが2キャンパスなので本校は4名。分担は教学・総合・思想教育・科学研究。
 - Q. 教学と科学研究の内容は?
 - A. 教学はカリキュラム編成・テスト管理・校内人事。科学研究は教員の再教育(上級申請者を増加させる狙い)。
 - Q. 模範校の特典は?
 - A. 優秀学生の増加、政府援助金の増加
 - Q. 民族教育の実態は?

- A-1. チワン族の割合は生徒教員共に10%。繡球(しゅうきゅう)投げなどのスポーツは学校で行うが、伝統文化継承は家庭に任せている。
- A-2. 大学では民族教育研究が行われている。
- Q. 日本の思想(道徳)教育は?
- A. 小中学校では週1時間設定、高校はすべての教育活動を通じて実施されている。内容は小中学校でマナー、高校は人としての生き方。
- Q. 日中交流の実態と成果は?
- A. 高校の交流は1年ごとに行き来する。成果としては人脈の拡大に繋がっている。
- 5. 校内見学
 - 普通教科3~5学級
 - 墨美術
 - デッサン
 - 図書館
 - コンピュータ室
 - ギター
 - 資料室
 - カウンセリングルーム、発散室
 - 標準化理科室
 - 民族衣装
 - 課外活動スポーツ

家庭で生徒が競技していたムカデ競争に日本人教員も参加。スタートでは出遅れたが、後半では日本人教員チームは中国側の生徒たちを追い抜いた。

(宇留間 準)

《参加者の感想》

早川 功 日本では高校にあたる学校だが、授業内容も高度で内容も多かったことが驚きだった。生徒の雰囲気は日本の子どもと同じで、小学校と比べると遠巻きに我々を見ていたところが逆に新鮮だった(歓迎、歓迎という感じではないところが)。クラブ活動などをもう少し見られると、校内生活の様子もわかってよかった。

大塚 雅信 日本の高校にあたる学校を訪問できた。地理や芸術などの実際の授業を見学できた。またコンピュータ室や図書館も見せてもらった。図書館はどんな本が置いてあるかは時間がなくあまり観察できなかったが図書館の様子は確認できた。逸仙中学の生徒は、非常にきちんとしていた。ただし、ムカデ競争などで盛り上がる場所や部活動の取り組みの様子など日本の高校生と変わらない所も感じた。

田嶋 修・・・・・・・・長崎は孫文のゆかりの地であり、親近感を覚える。中高一貫校のモデル校として地域の教育をリードする取組がなされているということで興味深く授業を参観した。授業の内容(高1)は日本よりも高く、少し前の詰め込み教育と非難された頃に似ていると感じる。しかしながら、積極的に発言するなど、意欲的な学習態度に感銘を受けた。日本の高校生ではこのような積極性は感じない。4名の副校長の役割を質問させていただいたが、教務主任や研究主任のような役割と感じた。

宇留間 準・・・・・・・・桂林の代表的な歴史と伝統を誇る模範校の実情が見学できた。特別に優遇されている学校として、外部に公開することも義務付けられていることも感じさせられた。模範校ではない普通の学校、普通の生徒、普通の教職員がどのような学校を形成しているのかに興味を湧いたが、類推はできる。

石隈 亨・・・・・・・・訪問した学校の中で一番年齢が高いこともあったが、多才な生徒が多くいたことが興味深かった。教室には生徒のものと思われる作品が並んでいたが、非常に優れていた。水墨画の授業は中国らしさを感じるとともに、そのような文化を学校の授業として後世に伝えていく姿勢に感銘を受けた。どの学校現場も素晴らしい歓待を受けたが、私たちが校内に入るときに生徒たちが整列して出迎えてくれた。もし日本がそのような出迎えをしたならば、必ず集中を欠いた生徒がいるものだが、整列していた生徒は皆真剣な表情であった。思春期独特の恥じらいもあるかもしれないが、そのような表情は見せず、しっかりと歓迎の意を伝える面は、精神年齢の高さを感じた。

小林 美礼・・・・・・・・模範的な高級中学のモデル校である。広西チワン族自治区の重点学校の一つで、政府からも運用費用が多く配当されるとのこと。校長が一人で副校長が3人いるのは手厚く羨ましい人事であると感じた。日本の道德教育の内容に関する質問があり、日中両国とも「人としてどうあるべきか」、徳育を育むことに関して課題があることを実感した。また、40分×8時間授業を行っており、理系の基礎教育に大変力を入れている印象を受けた。電子黒板が整備され、マイクを使った授業には驚いた。昼休

みが3時間もあることは意外であったが、共学で生徒会活動があり、運動がさかんで、読書率をチェックしたり、カウンセリングルームがあったりすることなどは親近感ももてた。

島岡 恵一・・・・・・・・週当たりの授業時間数や授業内容に驚愕した。数学の教員として、理系の人材育成を徹底的に行っている中国の進学校の実態を目の当たりにし、日本の立ち遅れた状況に対する危機感を感じて、その場で身震いをしたのは決して忘れることはできない。インターネットを中心とした21世紀を見据えた知識基盤社会に対応すべく、「データの分析」に関わる教科書のより実践的な記述内容やプログラミングの基礎であるアルゴリズム理論の修得を目指している点などは、日本はぜひとも参考にすべきである。具体的にはSSHの指定について、その条件の見直しを行うなどの対応が必要であろう。

玉井 智子・・・・・・・・モデル校であるためか施設が充実しており、立派な図書館があることに驚きました。図書館を活用しての授業もあるということ。実際の様子を見られなかったのが残念でした。少数民族への民族教育は、行政としては重視し始めているが学校としてはスポーツとして取り上げているほかは特に行っていないとのこと。12もの少数民族があり、文字も廃れていくなかでは、一校で対応するのは難しいようでした。

桂林市榕湖小学 (小学校)

[桂林市] 5月28日(木)

学校長: 賈玉榮 (JIA Yurong)
 設立年: 1905年
 児童・生徒数: 約1,373名 / 教員数: 43名

高い資質を備えた集団、高水準の管理体制、品格のあるキャンパス、質の高い教育を目標とし、「質・量ともに際立つ学校、特色豊かな学校、仁徳を重んじる学校、有名教師を擁する学校」を運営方針としている。また、「芸術教育」を特色としている。その成果として、「全国教育系先進組織」「全国芸術教育先進組織」「全国赤旗大隊」「中国少年科学院科学普及拠点」など、全国レベルから省、市、県レベルまで100近い称号を獲得した。

1. 榕湖小学校 賈玉榮校長あいさつ

本日は、皆様方の見学を迎えることが出来、光栄である。中日は、2,000年余り、両国人民が学び、各自が発展し重要な貢献を果たしてきた。敷地面積は9,672㎡、校舎総面積8,148㎡、25学級である。本校は、一流の環境と優秀な教員によって文化を重視し、芸術教育、素質教育を推し進めてきた。日本教員の活躍、勤勉、健康を願い、お互いに交流を促進したい。

2. 長沼町立長沼舞鶴小学校 石丸力校長あいさつ

本日は学校の皆さんにお会いでき、大変嬉しく思う。入り口で子どもたちに盛大に迎えていただき、思わず自分の学校が恋しくなった。今回の日本教職員招へいプログラムでは、様々な見学訪問があったが、同じ小学校ということから、一番楽しみにしていた。歴史と伝統の素晴らしい実践をされている貴校から多くのことを学び、職場や地域で報告していきたいと思っている。校長という立場から日中友好に役立てる子ども、教職員を育てていくことをお約束する。

3. キャンパス見学

榕樹(ガジュマル)の貼り絵があり、それに例え、生命力の強い樹のように健康に社会貢献できる人材になるよう、小学校のいろんな所で応援している。一週間で児童の勉強と礼儀によって採点し優秀なクラスは金色の葉を貼る。各自の努力でクラスが上がる。校舎壁に夢想樹と書かれており、子どもたち誰もが願いを持つように、習近平の24の文字が書かれている。校舎には、優秀な児童、賞をもらった子どもの写真・名前が飾られている。

チワン族の体育「繡球(しゅうきゅう)投げ」(一人が羽を投げて一人は籠に入れる)の由来は、恋愛している女性が刺繍を男性に投げたこととされている。通常の体育の授業ではなく、運動会の競技であり、文字のない少数民族の文化の継承の一つである。

日本人教員も「繡球投げ」に挑戦した。うまく籠の中に入れ、拍手された教員もいた。

安全体験園では、安全を大切にしなければならぬことから、警察と消防が来校し教える授業もある。

教室では、3年生で分数の授業を行っていた。漢詩の朗読週1回、書道の練習週1回行う。後列には桂林師範高等学校専科3年生が実習生として研修に来ていた。

教師の交流の場では、実習生が勉強をしていた。

淑女教室(女子の家庭科教室)は、家庭科を両親が交代で教える場であり、教師も一緒に指導する場となっている。

校庭では、エレキギター1名、アコースティックギター2名、ドラム1名、キーボード1名、ピアノ1名、ヴォーカル&ダンス4名、先生2名でフルート、ピアノ編成による楽器チームのバンド演奏が行われていた。チワン族の色彩の鮮やかな民族衣装を着た女子の児童が伝統舞踊を我々のために演じてくれた。また、団員と児童たちでチワン族の舞踊「劉三姐 踏歌来」を輪になって踊った。団員からは、「さくらさくら」「ふじ山」「茉莉花」を披露した。

その後、記念品交換を行い、同校を後にした。

(清水 一徳)

《参加者の感想》

北山 ひと美・・・・・・・・・・宋の時代から700年も続いている歴史ある小学校だった。鼓笛隊による出迎え、民族衣装を着けた子どもたちの踊りもこころに残ったが、行間に1,300名の子どもたちが一斉に集まり、きれいに整列し、「体操」を見せてくれたのにはびっくりした。3つの体操、1つ目は「マナー体操」、2つめは「韓国の音楽の体操」、3つめは「習近平主席の教えの体操」という内容にも驚いた。子どもたちが自由に遊ぶ時間が、放課後までないことを知り、1日中決められたことを決められたように行っていく小学校生活で、子どもたちの中に育てられるもの、育てられないものについて考えさせられた。

校舎の壁面にガジュマルの木が描かれ、そこにクラスごとに葉っぱが張られていく。学習や道徳的な行いなどで評価されたクラスの葉っぱが増えていくのだが、学年の幅があるところで競い合わせることの意味づけがよくわからなかった。歴代の「優秀な児童」が写真入りで飾られるのも、子どもたちを競争の中に追い込んでいく印象を受けた。

シャオリ 由希子・・・・・・・・・・しっかりと根、幅広く分岐する幹、色鮮やかな葉を持つシンボルの榕樹(ガジュマル)のごとく、長い歴史の中で築き上げられた教育体制、教育方針、教育環境のすばらしさを感じた。集団演技ではその高い集団性がひときわ目立った。また、教師一人ひとりの自信に満ちた指導が伝わってきた。そして何より印象的だったのは、子どもたちの生き活きと活動する姿だった。臆することなく自分の最大限の力を出し、自分の気持ちをまっ

すぐに表現する姿勢は、今の日本の子どもたちに欠けているものではないだろうか。なぜここまで、高い資質を持つ集団、個性を惜しみなく発揮する伸び伸びとした子どもたちが育つのか。そこにはしっかり自分の力を「評価」してくれる教育があるからだと感じた。学級ごとに設けられた榕樹(ガジュマル)に、努力の証である「葉」がつけられる。優秀な生徒は、顔写真付でその功績を紹介される。教師の写真も飾られ、教師の信念が書かれてある。自分という存在が認められ、努力を評価してくれる環境こそが、子どもと教師のやる気につながっているのだと感じた。成果を求めるのであれば、評価という視点を重視しなければならないのだと、子どもたちと教師たちの姿を見て再認識させられた。

早川 功・・・・・・・・生徒の笑顔や明るい雰囲気や圧迫された。学校をあげて歓迎してくれたことや生徒の様々な活動が見られて大変良かった。体操の時間やチワン族自治区ならではの遊びなど、子どもたちと交流できたのも大きい。全ての学校に共通していることだが学校間・学校内競争がはっきりしていて、上位の学校は先生方が熱心で上昇志向が強いのも公立としては驚きだった。

古閑 悦子・・・・・・・・温かく盛大な歓迎に驚くと共に、大変嬉しく思った。また、全校集会での入退場の規律正しい児童の様子に感心した。立ち止まってのあいさつ、明るい笑顔、堂々とした演奏や踊りなど、いきいきと学校生活を送っている。自信を持って教育にあたっている教職員の姿も見ることができた。児童や教職員が学習や生活において、評価を行い、学校全体がのびていっているのを感じた。

自分たちの先輩や民族教育、学校を大切にしていることも環境設営の様子から伺えた。逆の立場となったら、本校ではどんな取組を紹介し、児童の様子がどのように映るのだろうかとか客観的にふり返るよい機会となった。

中上 晴絵・・・・・・・・マーチングをしながらの吹奏楽の演奏、全校児童による学校独自の体操、規律正しくいきいきと活動する姿が素晴らしかった。また、民族の文化を大切にし、教育に活かしていく様子も伺えた。子どもたちや先生方と共に、「茉莉花」を合唱できたことは、国際交流として大変意義深い体験であった。

大塚 雅信・・・・・・・・まず全校あげての熱烈歓迎が強烈な印象を残した。そして統制のとれた行進の様子、「感恩共産党」や「入党宣詞」のポスターを見た時は、社会主義国家中国の一面を感じた。漢詩の朗読など、中国が伝統文化の継承にも目を向けているのを感じた。また女子児童によるチワン族の伝統舞踊は心がなごんだ。中国が多民族国家であることをあらためて認識した。少数民族の伝統や言語の保存については、桂林市で説明を受けたが日本でも調べていきたい。小学生は、どこでも素直に自分の感情を表現するものだったと思った。また、学校の歴史の長さも印象に残った。

田嶋 修・・・・・・・・芸術教育に力を入れている学校であることは興味深い。訪問時に見せていただいた、マーチングや民族舞踊はクラブ活動として実施しているようであった。短い時間であったが、いくつか質問をさせていただいた。その中で教師の年齢層が若く、学校の教育力の原動力になっているという話を聞き、うらやましく感じる。日本では教師になりたい若者が減ったり、新任教師が入ってこなかったりと「教師文化」の継承が危ぶまれている。この若い力と研修意欲は見習いたいと考える。

上原 泰・・・・・・・・児童数 1,300 人を超える学校の規模にまず驚いた。そして、その子ども達が、全校活動のために運動場や中庭に整然と移動する様子を見て、日頃の教育指導の徹底ぶりを感じた。校舎内を見学した際には、1 クラスに 50 名を超える児童が学んでおり、暑い中にもかかわらず一生懸命に勉強している姿や、立ち止まってしっかりとお辞儀をしながら挨拶する姿は、日本の子ども達も学ぶべきだと感じた。

また、ガジュマルの樹をシンボルとして、その生命力や成長する力を子ども達と重ねながら、教育に生かすよう工夫がなされていた。一つの取組として、校舎の壁にクラスの樹が描いてあり、よい結果を出したクラスの樹に葉をつけていくというものがあった。具体的な目標を持たせ、競わせながら、評価をしていくことで教育的効果を狙っているようであった。

更には、少数民族の文化を大切にした活動も組まれており、多民族国家ならではの教育的な配慮がなされていると感じた。

伊藤 英夫

○クラス 60 名の児童が熱心に学習しているのが印象的だった。1,373 名の児童が生活するには敷地が狭いと感じた。校庭の七つの卓球台はおそらく順番待ちで使うのだろう。

○ガジュマルの木に国家主席の政策テーマがあり、それに沿って各自が目標を立て木箱に入れると聞いた。教育は国家の指導の下にあるので間違いはないことであるが、徹底していることに驚いた。

○中休みに全体で体操をしていたが、その際も生活点検係がいて子どもが子どもをチェックしていた。優秀児童を写真入りで表彰したり、ガジュマルの木に付く葉の数で成果を明確化したり、評価が徹底していると感じた。

○英語の文字指導が低学年からしっかりしている。この中からエリートが育つのだろう。日本の英語をどう推進していくか考えさせられた。

○午後の授業のために帰宅する時間がない児童のために、寄宿舎のような部屋があるのには驚いた。確かに蒸し暑く、疲労対策は必要だ。

○教師の顔写真がアイドルのように掲示されていることが愉快だった。

○給食の配膳台を人力で担ぎ上げる様子にパワーを感じた。

○素直で明るい子どもに出会い、世界中子どもの本質は変わらないと感じた。

早野 直美

榕湖畔沿いに建てられた小学校の門をくぐると、子どもたちのマーチングによる熱烈歓迎を受け、一気に胸を打たれた。一人ひとりが表情豊かでおもてなしの心が表れていた。体操の時間に合わせて集合する様は整然としており、訓練・躰が行き届いていることが見て取れた。体操も上級生が列の先頭に立って手本となり、教師は見守るだけの取組はとても勉強になった。また、読書や目の体操も同様に上級生や代表がおり、手際よく進めていた。リーダーに自覚と責任を持たせ、やらせきる指導は、本校でも活用したい取組である。バンド演奏や民族踊りなど個や集団を伸ばす取組は見応えがあった。

石隈 亨

教職員の指導の姿勢によい意味での厳しさがあった。子どもたちの屈託のない笑顔が、ただの厳しさだけで指導されていないことの証であったと思う。群読で、子ども達の様子は意欲

的で、非常に表情豊かだったことが印象的だった。またその表情豊かさは、披露される演技全てに生かされていると感じた。安全教育として交通安全指導がなされているところは、交通事情が激しく、車社会が急成長している中国らしいと感じた。

石丸 力

整備されたキャンパスで行われている質の高い教育、児童は礼儀正しく落ち着いた学習態度であった。学校のシンボル「榕樹(ガジュマル)」の幹に目標を掲げ学級・学年で進化しようとする取組も勉強となった。特に、行進音楽がかかると各教室から全ての児童が静かに校庭に集まりリズムに合わせ「体操」「手話」を行い教室に戻る姿には感動した。その間わずか 10 分程であった。本校においても是非取り組みたい。

小林 美礼

全校をあげて日本の教職員を歓迎してくれた。次々と流れるようなプログラムは、準備が相当大変であったろうと想像する。児童の演奏、踊りなどは指導が行き届いていた。指導的立場にある管理職はすべて女性であり、レベルの高い女性教員によって、高いレベルの教育が行われていると感じた。

ほとんど女性教員である印象なのは、男子児童にとってロールモデルがなく、発育に影響があるのではないかと危惧するが、いかがであろうか。

清水 一徳

50 人学級、鞆を机の横に掛けられず、机の上に授業のある教科書全部を置き、先生がマイクで授業をしている光景は、日本ではない授業風景であり、成績による序列、子どもたちの歓迎時における洗練されたパフォーマンス、少数民族の文化の継承や芸術教育など選ばれた学校であり、学校の格差を感じた。

下条 知淑

小学校段階から、社会に貢献する人材の育成をめざす教育方針が、発達段階に応じた形で校内掲示の工夫や集団規律の遵守に現れていた。特筆すべきは、こうした集団規律を児童が積極的に守り、さらに高めていこうとする態度があったことである。

薄葉 みわ子

現場の先生方から、生徒の良いところを積極的に伸ばそうという熱意が伝わってきた。あらゆるジャンルの優秀な生徒の写真や

情報を校内に掲示したり、学力が高い生徒をミニ先生として、教科書音読の際指導をさせたり、ダンスや習字など興味のあるものを選択させ、発表させる機会を設けたりする等の取り組みをしていた。また、校内には多くの大学生がおり、学期に1度、1週間程度教育実習を行うそうだ。日本より手厚い教員養成のシステムだと感じた。

桂林市聾啞学校 (特別支援学校)

[桂林市] 5月28日(木)

学校長:程斌 (CHENG Bin)

設立年:1942年5月

児童数:

視覚、聴覚、知的な面で障害を持った児童・生徒が学んでいる。将来に向けた職業教育も行っている。踊りをする聴覚障害の生徒もいた。意欲的に教育に取り組んでいる若い教師を多く見かけた。

1. 程斌校長あいさつ

生徒と教師代表して敬意を示す。昨年11月、中国教職員招へいプログラムで日本に行った。東京、そして熊本県荒尾市の6つの学校を訪問し、日本の優れた教育が印象的だった。中国では、教育のバランスを重視している。子どもが公平な教育を受けられる。特別支援学校は、良質な教育を目指している。桂林教育局より、300万円の資金を受け、施設建設が続いている。

2. 日本側代表伊藤英夫副団長あいさつ

歴史ある支援学校にお招き頂き感謝している。全日制特別支援芸術人材養成拠点であるこの支援学校の訪問を楽しみにしていた。本校では、3年前に情緒学級が併設され、発達障害の理解が深まり指導法も変わり研究を進めている。

3. 施設案内

A、B班2つに分かれて、授業参観・施設見学。入学してから9年間在学。授業は職業訓練科目を参観した。

- ・ビーズアクセサリ
- ・美容・理容
- ・ぬいぐるみ

- ・調理
- ・ホテルベッドメイキング
- ・被服
- ・美術
- ・水墨画

4. 歓迎会

子どもたちによる踊りや先生方による踊りなどを披露。

5. 交流(双方による質疑応答)

Q. この学生は、どの地域から？

A. 桂林市以外の農村から。日本については知っていることは、テレビから。

Q. 日本の小中学校には、支援学級はあるのか？

A. ある。一人一人の子どもに一つ一つの指導計画を立てる。卒業後を考えて、支援計画がある。自立できるように教育することがとても大切。日本の支援学校は、1,080校あり、盲学校は85校、聾学校120校。

Q. 通常学級との交流は？

A. 交流は多い。子どもたちは自信を持つようになった。

Q. 日本の支援学校は、どんなことを学ぶのか？

A. 自立活動という障害を克服するためのもの。盲学校では歩行訓練、聾学校では手話など。小中学校では、職業訓練はあまり行われておらず高校になってから。

Q. パラリンピックでは、中国の活躍は世界一。スポーツを頑張っている子どもは？

A. 2名。雲南省で訓練を受けている。他の子どもたちも、普通学校の運動会に参加させ、「たゆまぬ努力があれば、聞くこと以外は何でもできる」という自信を持つようになってきた。

6. 教育長より

特別支援教育を先進国日本から学びたい。中国政府は、特別支援教育を重要視している。農村の子どもも入学でき、子どもたちは活発で明るい。教員の努力があつてこそだと言える。知的障害ある子どもたちが通う支援学校では、家から出られない重度の子どもに訪問して教育を行っている。

7. 記念撮影

8. 出し物

お礼に、「さくらさくら」「茉莉花(ジャスミン)」を歌った。

(古閑 悦子)

《参加者の感想》

北山 ひと美・・・・・・・・・・校長先生は、昨年和光小学校を訪問されたメンバーの一人だったので、特に親しみを感じた。

中国の先生から、日本の特殊教育(特別支援学校)についての質問が出され、文科省の森さんが統計的な部分を答えてくれて、中国との比較で参考になった。日本では特別支援学級と普通学級との交流が求められているが、中国でも行われているとの答えだった。しかし、すぐ隣の逸仙中学(高校)との交流は特に行っていないのが不思議だった。和光小学校は、どのクラスにも1~2名のハンディや発達に課題を持った子どもを受け入れ、共同教育を行っているが、異質な他者を受け入れ、共に生きていくという意識を育てるという視点での教育が必要だと考えている。

高校生たちがそれぞれに職業訓練を行っていた。いくつものプログラムがあり、プロにも関わってもらいながらの取り組みは、今後社会へ出て行くときの実践的な力になるだろうと感じた。

最後、体育館で子どもたちや先生たちが踊りを披露して下さった。私たちのためにこれだけの準備をして下さったのはありがたいと思う一方で、あの蒸し暑い中、教員たちとの交流に文句も言わずにつきあってくれている子どもたちの姿に、胸を痛めた。

衣装をきちんと着け、大人数での先生たちの踊りは、練習にも多くの時間を費やしたのだろうと考えられ、その間、子どもたちはどうしていたのだろうということもふと気になり、あれだけ多数の女性教員たちが見せてくれた踊りには違和感すら覚えた。

聾唖学校の生徒たちの中で、補聴器をつけている子どもは一人しか見当たらず、その子どもは人工内耳をつけているようだったが、他の子どもたちは全く何もつけていなかった。中国の聾唖教育での方針かもしれないと思って質問したが、「注文が間に合わない。」という答えが意外だった。何年も過ごしている生徒もつけていない、ということは、そもそも補聴器で少しでも音を拾うことができるようにという発想はないのかもしれないと思った。

シャオリ 由希子・・・・・・・・・・「すべては生徒のために、常に未来を見つめて」という学校理念が、充実した職業技術訓練から伝わってきた。裁縫、絵画、料理、ホテルのベトナムメイクなど、優秀な講師陣を配し、細やかな指導が行われていた。そして、その技術の高さを、生徒の作品や作業風景から感じ取ることができた。生きるための術を習得させ、自立への道を切り開かせるため、学校全体が一つになって取り組んでいる。芸術面にも力を入れ、自己表現の場を与えることで可能性を広げている。歓迎の舞では、華やかな衣装を身にまとい、一糸乱れず舞う姿に感動した。情熱ある教育は、生徒の可能性を最大限に発揮させるものであると、改めて感じた。

早川 功・・・・・・・・・・事前の説明でも近年特別支援教育に力を入れているという中国の姿勢が良く垣間見られる学校だった。先生方が非常に選抜されていて、優秀な先生が多いことや将来の就業を意識した実学教育に力を入れていたことも驚きだった。ただ、通常級の小中学生が学ぶ学習内容への配慮がどうなっているのかも少し聞いてみたかった。

中上 晴絵・・・・・・・・・・子どもたちの学習や活動の様子には、「たゆまぬ努力があれば、聞くこと以外は何でもできる」という教育理念が表れていた。施設や指導体制が大変充実している中で、一人一人の子どもたちが、学校を卒業後、しっかりと生きる道を見つけられるように、教育されていることがわかった。

大塚 雅信・・・・・・・・・・ここでは若手の教員、多くは女性教員であったが、意欲的に教育に取り組んでいるのが印象に残った。先生方の瞳が輝いていた。そして、児童・生徒が前向きに学習や職業訓練に取り組んでいる姿も見ることができた。生徒の絵からは、一所懸命に描いたことが推察できた。女性教員による踊り、そして児童との共同の踊りは、我々を歓待する気持ちが伝わってきた。自分の勤めている学校で、中国の学校ほどの歓待ができるのだろうかと考えさせられた。日本ならではの「おもてなし」を考えていきたいと思った。

上原 泰・・・・・・・・・・耳の聞こえない子どもたちのダンスでは、音楽に合わせてとても息の合った動きを披露してくれ、感動した。先生が手や指で合図を送ってはいたが、素早い動きの連続で、とても音が

聞こえていないとは思えない素晴らしい発表であった。

校内見学では、先生方が手話を学ぶ様子や指導されている様子を見学し、専門性の高さを感じるとともに、数多くの職種に関わる実習プログラムが実施されており、障害を持つ子どもたちの自立に向けて特別支援教育に力を入れていることを感じた。

更には、全寮制であり、先生方が1週間の宿直を交代で担当していることなども初めて知った。農村部で暮らす人たちの中には、特別支援学校の存在を知らない場合もあるということで、入学年齢は弾力的に受け入れているということであった。

伊藤 英夫・・・・・・・・・・

○エアコンのない施設でも一生懸命学ぶ生徒さんの姿が印象的だった。

○クッキー作り・ぬいぐるみ作り・ホテルマン・髪結い実習など、多数の職業教育を見て、自立を大前提にした職業訓練に圧倒された。

○知的障害者には週2回訪問指導があると聞いたが、まだまだ十分な教育が行き届かない状況であると思われる。

○聾唖の生徒さんのハンドサインや振動で成立するダンスは見事であった。更に、先生方のダンスパフォーマンスにも圧倒された。

○アレルギーについて日本の状況を話し、中国の現状を尋ねたが、理解してもらえなかった。おそらくまだ課題になっていないのだろう。

早野 直美・・・・・・・・・・「努力すれば何でもできる」「自信を持って夢を追っている」という学校側の説明通り、子どもたちのキラキラ輝く瞳に感動した。耳が聞こえないというハンディキャップを努力によって克服している姿の裏には、教師の手厚い支援が感じられた。多くの可能性を引き出すために、ベッドメイキングや調理、理容、ダンスなど日本の特別支援学校初等中等部以上の充実した取組みの多さに、日本と中国の差を感じた。何より、多くの事を学べる環境が整っており、多種多様な指導者を外部から取り込みながら指導にあたっている面が、子どもたちの夢実現への意欲につながっていると感じられた。

石隈 亨・・・・・・・・・・生徒のみならず、教師による舞踊を披露していただいたことは、感激すると同時に驚きがあった。我々日本人教師にはない文化だ

と思ったからである。今思い出してみると、どの学校でも教師の方々の教育指導以外の才能(書・歌・舞踊・画・演奏)を見る事ができた。日本人教師もそのような才能を持ち合わせていないわけではない。やはり日本はアピールが苦手だと、他国の学校を見て感じた。

子ども達の寮を見たときに、多くの場所にカメラが設置してあった。日本の寮ならばプライバシーの問題で、設置されることがないような場所にも設置されていた。どのように捉えるかは意見の分かれるところでもあろうが、現実として設置されている場面を見ると、「個人」に対する意識と文化の違いを感じた。

小林 美礼・・・・・・・・・・桂林の教育長と副教育長、また広報官も来校し、全校をあげて日本の教職員を歓迎してくれた。習近平氏の言葉に踊りをつけていたが、このように思想教育を行っている姿が分かる。女性教職員の踊りが始まったときは驚いた。いったい聾唖学校の何を紹介したいのかと困惑したが、これも中国流の歓迎の仕方なのだろうと理解し、お忙しい中わざわざ先生方が練習してくださった負担を考えると大変恐縮した。長時間に渡る歓迎会であったが、小さな子ども達も辛抱強く参加していた。

清水 一徳・・・・・・・・・・遠方からの生徒は、宿舎で生活をし、洗濯を含め自ら行い、芸術教育は、不自由なところがあるにもかかわらず、洗練されていた。日本の子どもたちには、これだけの精神力、忍耐力があるのだろうかと感じた。また、社会に出る時の教育、理容美容師やパティシエ的な指導も充実しており、日本でも取り入れるべきところがあると感じた学校であった。

下条 知淑・・・・・・・・・・特別支援教育として、児童・生徒の自己肯定感や成就感、達成感をもたせることを基盤に、卒業後の自立に焦点をおいた職業教育の充実ぶりが印象に残った。また、教職員の指導への熱意と、桂林市教育庁の特別支援教育への支援体制の厚さも参考になった。

玉井 智子・・・・・・・・・・ひとりひとりの持てる能力を最大限に引き出そうという先生方の情熱が非常に強く伝わってきました。普通学校との交流も行なっているようで、自信を持って生きていって欲しいという思いがひしひしと感じられました。障害が重く学校に

来られない生徒に対しても、教員が家庭を訪問して教育をおこなっていると聞き驚きました。

薄葉 みわ子・・・・・・・・・・授業見学後、歓迎プログラムに参加させていただいた。授業では、ベッドメイキングの仕方や料理、裁縫の仕方など、卒業し仕事をする際すぐに役立つような実践的な内容が多くあった。また、歓迎パフォーマンスはどれも素晴らしく、「耳が聞こえなくても、なんでもできる！」と自信を持って発表する姿には胸が熱くなる思いであった。

上海市進才実験中学 (中学校)

[上海市] 5月29日(金)

学校長:楊龍 (YANG Long)
設立年:2001年7月
児童数:約1,522名
教員数:約140名(内、専任教師122名)

上海市進才実験中学の位置する浦東新区は、多文化コミュニティであることから、生徒は、上海出身者以外にも中国各地、また世界各地の異なる文化背景を持つ者が多数在籍し保護者は教養・経済ともに高い。学校の運営理念は「生徒一人ひとりに卓越した成長とサービスを」である。個性を尊重し、希望や適性を踏まえた教育を実践することにより、芸術や体育そして科学技術教育においても優秀な成績を収めている。

1. 楊龍校長のあいさつ

2001年に進才学校の基礎実験学部として開校、主にレベルの高い学生を主としエリート教育を行っている。キャンパスがそれほど広くなく学級数が増加したことから2010年に中学部として独立した。特色としては、コンサートの活動が有名でたくさんの賞をもらっている。他に書や絵画も盛んである。体育では、バレーボールが有名で国家的選手も2名輩出している。他にサッカーやピンポン、柔道や武術も行っている。また、科学技術教育にも力を入れており、ロボット作成や発明にも取り組んでいる。外国語教育は、英語の他に第二外国語としてフランス語・ドイツ語・日本語から選択できる。

2. 訪問団代表宇留間準氏のあいさつ

訪問の最大の目的は、中日交流の民間交流の輪を広げることと思っている。私たちは、毎日現場で教育実践にあたる人間として皆さんと教育交流を進めたい。青少年の健全育成と将来を担うこどもたちを育てることを通じて中日の友好の輪を少しでも拡大できたらと思っている。

その後、訪問団代表者が中国語を交えて自己紹介を行った。

3. 記念品の交換

進才実験中学校より学校の旗・キャンパスの写真・・・家庭学校パンフレット、訪問団より浮世絵師、北斎の絵と浮世絵の書

記念品交換後、学校の歴史を伝える記念室を見学し、生徒との交流と教師との交流の二班に分かれた。

4. 教師との交流:

副校長2名と発展センター教師・英語教師・数学教師・理科教師・芸術教師、7名と懇談した。

Q. 芸術や体育の部活に力を入れて指導しているか？
聞いたが、外部からプロの方が来て指導しているのか？

A. 上海の芸術センターからレベルの高い指導者が来ている。

Q. その費用は、家庭が負担しているのか？

A. 学生から経費は、一切もらっていない。

Q. グローバルリーダーを育てるためにどのような教育をしているのか？

A. 普通の中学校であるが、国際的な地区であることから優れた生徒も多く、その個性を専門家による指導により伸ばし、グローバルリーダーの育成を図っている。

Q. 貴校の研究課題は何か？

A. 今は、新しい教師の育成である。

Q. 科学技術に関する教育の具体的な内容は？

A. 授業の中で一つの課題を出して学習、親の仕事とリンクさせるなど工夫している。また、科学技術のゲームなどにも取り組ませている。「科学祭り」を実施し専門家との交流も行っている。また、部活は、生徒の興味により行っているが、ロボットの部が学生の人気となっている。

Q. 学力の高い学校は、生活指導も道徳指導もしっかりできているというイメージを持っている。日本

では、週に一回道徳の授業を行っているが、貴校では道徳の授業を行っているのか？テキストがあるか？

- A. 予備学科として小6は週1回、中1から中3は週2回くらい授業を行っている。また、テキストもある。内容は、小6は、家庭に関わる道徳と礼儀、中1は、学校生活の中での道徳、中2は、社会的な面の道徳や簡単な法律、中3は、国家レベルの道徳や愛国心などである。

5. 生徒の交流

日本語を勉強している生徒との質疑応答。6～7年生。男子4名、女子6名計10名。日本側は、教員13名が参加。通訳は、日本語を教える外部講師の周佳云先生。

Q. 将来の夢は？

- A. 上位の大学を出て、よい企業に入社すること。設計の仕事。デザイナー。旅行会社。作家になり、小説を書く。通訳。ハーバード大学に入学したい。弁護士。起業家。医者。教師。ピアニスト。

Q. 日本語を学んで難しいところ。また面白いことは何か？

- A. ひらがなとカタカナがあるのが、ややこしい。単語が覚えにくい。聞き取れると嬉しい。

Q. 学校の活動の中で楽しいことは何か？

- A. 放課後、クラスメートとグラウンドで遊ぶこと。運動会で寿司をつくること。

Q. 親にどんなことを注意されるか？

- A. 早く寝て、睡眠時間を確保しなさい。ゲームをやり過ぎないように。授業以外の活動も大事にしなさい。(日本の親が言うこととほとんど同じである。)

Q. スマートフォンを持っているか？1日にどの位使うか？

- A. 出席した生徒は全員が持っていた。使用時間は、1日1時間。

Q. 日本の中学生にどんなことを質問してみたいか？

- A. 日本の学校生活は、どうですか？

クラブ活動は、楽しいですか？

宿題が多いですか？

授業のレベルや進度は中国と同じですか？

アニメが好きだが、日本の生徒もアニメが好きですか？

高校入試でプレッシャーを感じますか？

クラブ活動の料理教室はありますか？

高校に入ってから学校生活はどうですか？

塾に通っている生徒は、多いですか？

それぞれの交流後、合流し授業参加や部活動バレーボールやオーケストラの練習を見学、生徒の書や絵画の鑑賞、ピアノ演奏を聴き記念撮影を行った。

(石丸 力)

《参加者の感想》

北山 ひと美・・・・・・・・・・2010年にできた学校だけあり、校舎が新しくエントランスも明るく広々としていたのが印象的だった。課外活動としてのバレーボールの練習、オーケストラの演奏を參觀したが、どちらも区域外からの生徒を受け入れ、指導者もプロを招いていることから、その道でのエリートを養成することを目指していることがわかった。

日本語クラスの中学生10名との直接の交流ができたのがよかった。子どもたちは将来の夢をそれぞれに語ったが、何にこだわっているのか、なぜそれが「夢」として目指そうとしているのか、の話が十分伝わらず、残念だった。

日本語のクラスではあるが、日本の情報はメディアからしか伝わっていないことがわかり、特に日本に興味を持っている様子ではなかった。

シャオリ 由希子・・・・・・・・・・国際色豊かな環境に位置し、効率的な学習指導とオーケストラなどの芸術面や、バレーボールなどのスポーツ面で特色を出す先進的な校風を感じた。そして何より、生徒たちの英語の能力、コミュニケーション力の高さに驚いた。廊下で出会った12歳の男子生徒、Bobbyは気さくに流暢な英語で自分の夢を語った。「日本に行った経験があり将来は日本を訪れたい。日本人はとても親切でぼくは大好きだ。」と笑顔で語るその姿に、受容共生の意識を持った国際人の姿を感じた。写真撮影に参加した芸術クラスに所属する女子生徒たちは、笑顔で学校生活について語った。「なぜ英語を話せるのか」という問いに、「英語は必要だから」と自然に答えた。彼女らには、コミュニケーションのツールとしての英語力がしっかり身につけている。目指すべき国際性を持った生徒の姿がそこにはあった。英語教師として、刺激を受けた出会いだった。

古閑 悦子・・・・・・・・上海の実験校訪問は、興味深かった。国際社区の中心に位置する学校であることから、国際色豊かな学校で、優秀な生徒を多数輩出している。生徒は、英語のほか、日本語など言語教育を受けており、中学生が英語でコミュニケーションがとれる姿に驚いた。優秀な教師や整った施設の中で、エリート教育が行われているのを実感した。

生徒との交流は、楽しく、自分の夢や考えを堂々と述べる姿や、課外活動を楽しんでいる姿を見て、ほほえましく思った。日本の文化や学校教育のよさも話してくれた。日本の子どもたちにこのことを伝え、中国の学校教育や子どもたちのよさもはっきり伝えていこうと思う。

中上 晴絵・・・・・・・・レベルの高い学習をしている様子が伺えた。6～7年生の子どもたちと交流の時間が持てたことが大変貴重な体験であった。日本のどんなことに関心を持っているのか、また、上海の中学生としてどんな生活をしているか、直接、子どもたちの声を聞けたことが良かった。しっかりと自分の考えを述べられる姿が素晴らしいと感じた。

笹尾 弘之・・・・・・・・上海進才実験中学校視察では、「教育現場での交流・意見交換による日中両国の教育の質の向上」という目的に対する成果があった。

この学校は、上海の高級マンション街に位置するエリート校である。親の収入は高く、生徒たちの様子から、小学校時代から質の高い教育を受けてきたことが伺える。ここでは生徒へ直接質問する機会をもらい、中国の学生の目的意識の高さを知ることが出来た。

上海進才実験中学校と同じように、私の勤める市川中学高等学校も県内では有数の進学実績をほこり、質の高い教育を行っている。しかし、生徒の目標・将来の夢に対する考え方は全く違っていた。生徒交流の場には、12歳・13歳の学生が10名ほど参加したが、全員が自分の将来について真剣に考え、どうしたらその目標を達成できるかのビジョンも見えているように感じた。日本の学生で、同じように将来を語れるものはどれくらいいるだろう、と考えてしまった。

デザイナー、弁護士、医者、翻訳家といった将来の目標達成のためにやるべきことは明確である。人一倍勉強し、良い学校へ進学すること。学生の親など、勉強して成功した人々は目の前にいるため、そのような高い目標に向かって進む勇気や自信にあふれて

いるのだろう。

今の中国は日本の高度経済成長期と同じようなハングリー精神を持った学生が本当に多いのだろうと考えるとともに、今後の中国のさらなる発展に危機感も感じた視察だった。

田嶋 修・・・・・・・・生徒と直接意見が交わせる唯一の訪問地であった。生徒たちが自分たちの将来の夢を堂々と語る姿に感銘をうけた。長崎市は教育目標の1つとして夢や憧れを語るができる生徒の育成を目指している。教育活動全体を通して、子どもたちに自信をもたせるようなことがなされているのであろう。また、優秀な教師陣が良い意味での競い合いをしながら、日々研究に取り組んでいるものと感じる。

上原 泰・・・・・・・・中国の学校を4校訪問した中で、初めて子ども達と直接対話する機会があった。実験中学校であるため、エリート教育が進められているとは言え、一人一人がしっかりとした考えを持って、はっきりと話をする様子は堂々としていて、日本の同年代の子どもよりしっかりしていると感じた。

また、交流の中で日本の中学生に聞いてみたいこととして、勉強や学校生活のこと、アニメのこと、高校入試や大学入試のことなどがあり、同年代の子ども達の興味や関心は世界共通の部分があると感じた。

しかし、中学生の年代の子が、英語を普通に話しており、語学力の高さを感じるとともに、教科書も日本の同学年の学習に比べて難しい内容が掲載されており、上海における国際社会に通用する人材育成(エリート教育)の教育水準の高さを感じた。

宇留間 準・・・・・・・・冒頭の校長あいさつにおけるエリート教育発言に衝撃を受けたが、公立学校の校長として使命感の強さと、中央政府と上海の関係から理解しなければならないと考える。紹介された目標と実行されている内容(公開された)の間に乖離を感じた。

伊藤 英夫・・・・・・・・

○世界トップレベルの学力を維持している上海の学校として、大変興味をもって参観した。明確にエリートを養成していることが分かりやすかった。

○生徒10名と意見交換できたのがよかった。日本に行ったことがある生徒が6名いた。「日本のアニメに興

味がある」と語り、将来の夢を聞くと「いい大学に入って事業を興す」「デザイナー」「翻訳家」「医者」「作家」「文化を研究する先生」など自分の言葉で語る姿がよかった。

○日本の中学生に聞いてみたいこととして「日本はクラブが多くて楽しいと聞いた」「昼食後掃除をするのは小学校から?」「高校入試のプレッシャーはあるのか?」「塾に行くのは通常のことか?」などが出された。

○校門に「市重点」「区重点」の生徒が顔写真入りで紹介されていた。きっと名誉なことなのだろう。更に「友達に優しい生徒」「〜で頑張った生徒」などが顔写真入りで掲示されていた。

○この実験校から今後多数のリーダーが生まれるのだろう。是非日中の交流を推進したいと感じた。

早野 直美・・・・・・・・生徒との直接的な交流を持てたことが大きな収穫であった。「夢は何か」、「学校で一番楽しいことは何か」、「親から言われることは何か」、「スマートフォン活用事情」など生の声を聞くことができ、中国の子どもを近くに感じる事ができた。全員が自分の人生を成功させたい思いでいることが、言葉は通じずとも十分に伝わってきた。さすが、「レベルの高い生徒対象で、エリート学校である」という学校側の説明にも納得であった。生徒は高い目標を持っており、絶対にそうなるんだという意思の強さは、中国という国の特徴なのか、この学校だからこそのものか、少し疑問に感じた。いずれにせよ、その願いが叶う・実現できることが予想される見事な学校施設・設備であった。

石丸 力・・・・・・・・バレーボール、サッカー、コンサート、現代切り紙、ロボット発明等々、各領域におけるスペシャリストによる充実した指導体制、その指導に瞳を輝かせ応える生徒達の姿に感動した。また、訪問団との懇談において将来の夢は、ハーバード大学への入学、弁護士、医者と堂々と語る生徒から、レベルの高い生徒が在籍する学校という印象を強く持った。

小林 美礼・・・・・・・・玄関ホールにグランドピアノがあり、吹き抜けの開放的な空間に、設備の良さを感じた。能力の高い子ども達の集団であり、媚びずプライドが高く、都会の学校らしく洗練されている印象を受けた。校長先生がエリート教育をしていると

言っていたので、具体的な取り組みについて質問したが、あまり細かい回答は得られなかったのが残念である。オリジナルの問題集を作成し、芸術教育や部活動を重視しているところは、日本の学校と良く似ていると感じた。第2外国語として、日本語、仏語、独語が選べるのは素晴らしいと思った。女性教員が80%を占め、ここでも女性教員の多さが気になった。スマートフォンは全員持っており、学校では電源を切らせているところは同じである。広州に修学旅行に行っており、教育システムがかなり日本に近い印象を持った。

清水 一徳・・・・・・・・本校に通うべく、新たに校区をつくるなど、中国の中でも上海は、北京との違いを強調していると感じた。まさに富裕層の学校である。子どもたちにおいては、北京、桂林と違い挨拶を含め、都会っ子といった感じであった。いずれの学校においても、芸術教育に重点をおいていることが、共通点であった。

下条 知淑・・・・・・・・上海という地域特性がある公立学校として、校長先生自らエリート育成を公言する学校と位置づけは日本では考えにくいだけに、学校経営についてより説明を聞きたいところであった。また、生徒との意見交換会では、自分の夢を自信をもって語る生徒の多さに、日本との相違を強く感じた。

玉井 智子・・・・・・・・非常に恵まれた立地・生徒たちの家庭環境を活かし、バラエティに富んだ教育・カリキュラム外の活動を行なっているようでしたが、日本では費用面からも難しいように思えました。

4.

歴史と文化訪問

故宮博物院・天安門見学

天壇見学

漓江下り

外灘見学

中華芸術宮見学

上海博物館・豫園見学

故宮博物院（紫禁城） 天安門

【北京市】 5月24日(日)

故宮博物院は明、清の歴代皇帝と皇后が暮らした宮殿の遺構で、清代には紫禁城とも呼ばれた。総面積72万㎡の広大な敷地に、南の午門から北の神武門を中心に左右対称に造られている。膨大な文化財を収蔵し、1987年には世界遺産にも登録された。

天安門は故宮の外城壁南側に位置する正門である。1949年10月1日に、毛沢東が楼上から中華人民共和国の成立を宣言して以来、中国を象徴する場所となっている。

李春燕さんのガイドで、午門から入城し、まず式典が行われた太和殿を見学。式典が行われた時は、太和殿前の広場に官吏たちがずらりと並んだという。太和殿手前の石段(中央に彫刻された石があり、皇帝がかごに乗って上がった。)を上ったところには「日時計」、「亀の像」、「鶴の像」などが置かれている。また、太和殿の前には、銅製の大きな水瓶も置かれている。表面の金箔は、1900年の義和団事件の時に八か国連合軍の兵士が削り取り持ち去った。そして中和殿、保和殿、乾清宮、坤寧宮を見学。最後に皇帝が皇后や妃と共に自然を愛でた場所で、松の木(白皮松)や水流で自然にできた奇怪な形の石の山が積んである御花園を見学し、神武門から出た。たくさんの観光客が来ており、壮大な施設に驚きながらの視察となった。

この日は、気温は高かったが、風が強く心地よさを感じた。

その後、バスに乗り、天安門広場に向かう。広場は、最大で50万人を収容でき、国家行事や歴史上の大事件の舞台となった。軍隊の駐屯地でもある。天安門前の大通り(長安町通り)の車道は80mもあり、飛行機の着陸が可能とのこと。天安門広場には、多数の警察官が配置されており、重々しさも感じた。

(古閑 悦子)

天壇

【北京市】 5月25日(月)

天を祭った場所であり、故宮の4倍を超える広大な面積を誇る。世界遺産に登録されている。壇を回りの字型に配置しており、その形は北方向の壁が半円形、南方向の壁は方形で中国古代の宇宙観である「天圓地方」説を表している。至上のものである天は万物を支配する権威で、皇帝は天命を受けた天子と称した。明代に建設され、清代に増改築が進められた。二十数人の皇帝が盛大な儀式・祭典を行った。

李春燕さんの案内で見学し、随所で自由行動の時間が設けられた。

(宇留間 準)

漓江下り

【桂林市】 5月27日(水)

桂林市内を南北に貫く全長437キロの漓江のなかでも、最も景観が優れているといわれる竹江埠頭～陽朔間60キロをのんびりと遊覧船で下る。川は両側に林立する奇峰を縫うように流れ、晴れた日には青い川面に緑の山が映り美しい。雨の日にはまるで水墨画のような幽玄の世界が現れる。

桂林観光のハイライトはなんと言っても漓江下りである。水墨画のような桂林独特の風景を楽しむことができた。桂林市内を南北に貫く全長437キロの漓江のなかでも、最も景観が優れているといわれる竹江埠

頭～陽朔間 60 キロをのんびりと 3 時間かけて遊覧船で下った。3 階デッキでは十分景色を楽しむことができた。兩岸に民家も見られたが、山間の庶民の暮らしぶりも垣間見ることができた。デッキからの眺望は、まさに中国語で「奇山秀水」と言われるように、絶景の連続であった。

(小林 美礼)

外灘 (Bund)

[上海市] 5月29日(金)

上海は、1842 年のアヘン戦争後の南京条約により開港した都市である。その後、欧米列強が租界地を作った。その租界地の名残が、外灘である。ここには 20 世紀初頭に建てられた西洋式建築のビルが立ち並び、歴史的な国際都市上海の景観を形成している。黄浦河をはさんで対岸の浦東には東方明珠塔や金茂大廈が建っている。夜はライトアップされ上海の華やかさを一層引き立てている。

約 1 時間半の自由行動となった。買い物をする者、ホテルの喫茶室でお茶をする者、西洋建築を見てまわる者などそれぞれが自分の思うままに足を運んで外灘を歩いた。国際都市上海では、英語も話されていた。

(大塚 雅信)

中華芸術宮

[上海市] 5月30日(土)

中華芸術宮(チャイナアートミュージアム)は 2010 年に上海で行われた「上海万博」の中国国家館の建物を、万博後、2012 年上海美術館を移転させ、拡大してオープンした芸術館である。中国人作家の作品を展示する芸術館として活用している。

朝ホテルを出発し、上海万博の中国国家館の建物を利用し、現在美術館として活用されている「中華芸術宮」を見学した。逆三角形の朱塗りの奇抜な建物である。中は 4 階建てで、エレベーターで上がると、中国の宋時代の都開封の暮らしを描いた「清明上河図」が大スクリーンに CG で映し出されている部

屋があり、その迫力に圧倒された。その他絵画を中心に、彫刻・レリーフなどたくさんの芸術作品が展示されていた。

(小林 美礼)

上海博物館・豫園

[上海市] 5月30日(土)

1. 上海博物館

上海人民広場の中央に位置し、建物は中国古代思想の「天圓地方(天は圓く地は方形)」説を表す構造となっている。コレクションは膨大で質が高い。以下の 21 部門に分類・展示されているが入館見学は無料である。部門は中国古代青銅・中国古代彫刻・中国古代陶磁器・暫得樓陶磁器・中国歴代絵画・両塗軒書画・中国歴代印章・中国歴代書蹟・中国少数民族工芸・中国古代玉器・中国明清家具・中国歴代貨幣・シルクロード中央アジア古銭となっている。

自由見学。2 時間ではとても見終わらないほど質量共に充実した展示だった。

(宇留間 準)

2. 豫園

明代に造られた江南を代表する古式庭園。園内は 5 つの景観区と内園に分かれ、大小の楼閣、緑、池の水面、美しい名石が見事に調和している。庭園を囲むように土産物屋や軽食店がひしめき、多くの観光客でにぎわっている。

各人が自由に豫園を見学した。お土産を買ったり、小籠包を賞味したりするなどそれぞれが豫園の雰囲気を楽しんだ。

(清水 一徳)

5. 成果と 今後への活用

A グループ

中国の子どもたち

和光小学校 北山 ひと美

事前に「中国の教育事情」についてレクチャーがあり、教育による人材育成、特に基礎教育の普及と、質的な向上を目指していることがわかった。広い中国なので、都市部と農村部、また地方によって教育内容に違いはあるのだと思うが、桂林の榕湖小学校は、国全体が基礎教育に力を入れ、子どもたちの資質の向上を目指して実践している様子が象徴的に表されていると感じた。クラスごとの競い合いが目に見える形で打ち出され、優秀な子どもが顔写真入りで掲示されることなど、ともに学び合い高め合うことを目指す私たちの教育観の対極にあるように感じた。日本の教師たちに自分たちの姿を見てもらうためにはりきって体操をしている姿や体操の内容、子どもたちが自由に遊ぶ時間が、学校生活の中ではほとんどないことなど、子どもたちが学校生活をどのように受け止めているのか、もっと知りたいと思った。聾啞学校では、職業訓練を重視していることが、「人材育成」と結びつくところだろうが、学ぶことの喜びを、いつ、どのような形で実現できるのか、もう少し知りたいと思った。

4つの学校訪問に加えて、文化施設、景勝地の訪問も組み込んでいただき、様々な角度から中国に触れ、その中で暮らす子どもたちの教育、生活について学ぶことができ、たいへん意義深いプログラムだった。

[今後への活用:学校において]

- ・教職員には報告会、保護者には教育講座で報告する予定。
- ・学校 HP の「校園長ブログ」でも、今回のプログラムで学んだことなど、伝えていきたい。

[中国との教育交流についての具体案]

姉妹校締結ができれば、互いにホームステイ交流ができるのではないかと思います。

本校は、異文化国際理解教育に力を入れており、とりわけアジアの国々、中でも最も近い関係にある中国、韓国との関係は大切にしたいと考えている。国が違えば、教育方針が大きく異なることも考えられるが、交流を重ねながら、互いの教育を学び合うこともできるのではないかと思います。

百考は一行にしかず

長崎市立江平中学校 シャオリ 由希子

2000年以上にわたり文化、経済、あらゆる面で関係を築いてきた中国と日本であるが、近年は関係の悪化が懸念される報道が目につく。真実は自分の目で見なければわからない。まさにこのプログラムを通して、「百聞は一見にしかず」を体感した。

多民族国家である中国が、全民教育を目指し、国レベルで教育改革を行う強い姿勢に、中国の勢いを感じた。個性を活かす芸術教育、少数民族を意識した民族教育など、それぞれの特色を活かした教育のもと、教育現場には希望に満ちた教員や子どもたちの姿があった。私たちが受け入れ歓迎を表す姿は、国境など感じさせない。学ぶ喜びを感じ、精一杯生きる子どもたちは、どこにでも同じように存在する。

「百聞は一見にしかず」の続きに「百考は一行にしかず」とある。どんなに考えても行動を起こさなければ前には進まない。この感動を伝えるという行動と成果こそが、今後私に課せられた課題であると強く思う。

[今後への活用:学校において]

- ・国際理解教育の研究への活用

長崎市は国際理解教育の推進に力を入れている。本校は研究指定校として「受容共生の意識」「郷土愛」「コミュニケーション力」の3つを柱とし、その研究に取り組んでいる。その取り組みの1つに「国際理解講演会」がある。外国人講師を招いて、様々な国の歴史や文化、価値観などを学ぶ。7月に長崎市国際課の中国人講師を招き、「中国の文化について

て」というテーマで講演会を開く予定である。その際、コーディネイターとして、今回の体験を用いて授業を行いたいと思っている。

・校内研修の実施

国際理解教育の研修の一環として、職員を対象とした中国の教育事情や課題についての研修を行いたい。海外の教育事情を知ることで、自国の教育について改めて考える機会になればと思っている。

・生徒たちへの情報提供

朝の15分の「心の時間」を活用し、生徒たちへ中国の生徒たちの姿を伝える。6月10日に第1回目の情報提供を行った。また、掲示板や英語科通信を利用して、写真や情報を提示していきたい。

・英語の授業での活用

Warm Up や英語の活動の中で活用していきたい。例えば6月12日の公開授業においては、中国語の表記を用いて、ゲームを行う予定である。

[今後への活用:その他において]

長崎在住の中国人の方々との交流できればと思っている。人脈を広げることで、視野を広げ、自分自身の成長につなげていきたい。それを、教育現場に還元できればと思っている。

[中国との教育交流についての具体案]

中国の生徒と本校の生徒をつなげる活動ができればと思っている。手紙やメールを活用して、交流を深めたり、テレビ電話を使った会話ができたりすれば、理想的である。しかし、本校ではこれまで取り組んだ実績がないため、今回出会った日本の教員や教育関係者とのつながりを活かし、まずは情報収集に励みたい。

未来志向の日中関係を構築するために 多摩市立落合中学校 早川 功

百聞は一見にしかず。「参加したことは間違いなかった」と確信できるプログラムでした。持続可能な社会を形成するためにもアジアの安定と平和は極めて重要で、その中で日本と中国の関係は当該国のみならず世界への影響も極めて大きいことは言うまでもありません。そうした中で、子どもたちの抱く中国へのイメージはマスコミやネットから得る偏向した情報が極めて多いことも憂慮されることでした。日中の関係は、過去、文化交流を中心に3千年以上にわたるものです。そうした中で、一時期、両国国民にとって悲劇的な時期もありましたが、多くは極めて両国の発展に寄与

る関係だったはずですが、こうしたことを再認識できるような、当プログラムは子どもたちに関わる教員にとって大変有意義で未来志向の両国関係を築く上で大変重要なことだったと思います。

本プログラムの中で、多くの時間を割いて中国の文化や歴史に触れられたことや、多くの中国の方々へ接する機会を与えてくれたことは、特に大きな成果だったと思います。また、小中高・特別支援学校など様々な校種の学校を見学できたことも、中国の教育システム全般を理解する手助けとなりました。授業見学に加えて、生徒との交流や部活見学、教員交流など多角的に交流が促進できたことも大きな成果でした。また、食事の機会を通じて現地のスタッフや教員と情報交換できる時間があつたことも有意義な時間でした。

政治システムや国民性が異なる中で、過去十数回にわたりこうした企画を推進してきた関係者の皆様のご苦勞は大変なことだったと思います。中国教育部の方々も一貫して訪問団の成果をあげるために受け入れ地区・学校と難しい調整を積極的に行っていただき、さらに日本側の教職員の様々な要望にも嫌な顔せずに対応いただき本当に感動しました。今後も多くの教員が参加できるよう企画の継続の実施と、一度目ではなかなか理解できなかったことが多かったので、ステップアップ理解が出来るような2回目の訪問実現も検討いただければ幸いです。

[今後への活用:学校において]

すでに実施をしましたが、担当学年の子どもたちに報告会を実施し、中国の子どもたちの姿や文化などを報告しました。また、教員向けにも成果報告の時間をとっていただけることになっています。

また、本校はユネスコスクールとして国際理解教育に力を注いでおり、先日も3カ国の留学生の派遣を受け子どもたちとの交流を行いました。その際には、今回の訪問で自らが受けた歓待を参考に、子どもたちに現地の挨拶や基本的な文化の周知を今まで以上に徹底したところ、留学生のほう喜んでくれています。今まで、どのような姿勢で訪問団を受け入れるか思案していましたので、自らが海外の学校を訪問した経験が大きく生きたと思います。

また、社会科の授業にも中国の理解や興味・関心を引き出し、学習課題を引き出す知識としていきたいと思っています。

[今後への活用:その他において]

個人的には中国への再訪問を実施したいと思えます。また訪問を通じて感じたことは、語学的知識や能力がないとコミュニケーションに問題が生じるので、中

国語にも興味を抱いています。

[中国との教育交流についての具体案]

- ・歓迎マーチング演奏
- ・子どもたちによる合唱
- ・授業見学(体育・音楽・理科・英語)

体育・音楽は言葉が違ってもわかりやすいのと、音楽の授業が比較的中国は力が入っていなかった気がするため。理科も実験設備は日本のほうが進んでいるのと、英語は ALT を入れた教育方法は日本的だと思います。

- ・教員交流
- ・学習教室見学(地域支援本部と行っている学校立の塾) ※曜日による
- ・部活動見学

今回訪問して感じたのは、日本の学校で当たり前の学校行事や職場体験、修学旅行や校外学習、総合の時間という概念があまり中国にはなかった気がするので、タイミングが合えばこうしたものも見学も面白いかと思います。

個人的には、部活動で音楽交流を行える機会を作っていければと思います。方法は思案していますが、ビデオレターが一番取り組みやすいので、学習の成果を受けて子どもたちと訪問のお礼をかねたビデオを作製し現地に送ってみたいと思います。ゆくゆくは、相互訪問を実施し合同コンサートが出来たらと思います。音楽であれば、両国国民の理解や参加もしやすいため、演奏前後にお互いの紹介などを入れることで文化交流には最適かと思います。

未来を担う子どもたちの育成を重んじる教育のよさを実感

荒尾市立万田小学校 古閑 悦子

日頃、目の前にいる児童に一喜一憂しながらの毎日から離れて、中国という大国の教育現場を実際に目で見る事ができて、とても有意義であった。学校現場だけでなく、行政機関の訪問から、国の施策が各学校へおろされ、浸透しているのを実感することができた。児童・生徒の教育に当たっている教師の質を向上させること、民族教育を大切に教育の均等化を重要視していることから、教師の研修や労働環境の向上、学校施設が、資金を投入して整えられていることも実際に見て分かったことだ。日本の教育や文化のよさに敬意をはらい学ぼうとする姿に、自分が学ぶ

ことが多かった。国の政策や文化、生活環境の違いから、日本では難しいこともあるが、今回、参加された日本の文科省や教職員の方々からも、それぞれの立場で、未来を担う子どもたちの育成に努力していることもよく分かった。自分がその一職員であることを再認識し、今回見て聞いて学んだことを視野に入れて、今後の仕事に活かしていきたい。

[今後への活用:学校において]

- ・職員に、職員研修などを通して、報告をする。
中国の基礎教育を重んじていること、それに対する取組、学校現場で実践されていること、児童・生徒、教職員の様子など、画像をもとに具体的に紹介する。
- ・報告したことをもとに本校の取組に活かせることはないか、話し合っていく。
- ・主に国語の授業を担当することから、授業を通して、日本の文化のよさを認識させたり中国の文化を紹介したりして、理解を深めさせたい。交流の楽しさやよさを伝えたい。
- ・中国の子どもたちの学ぶ意欲の高さ、将来の夢を語る姿について話し、子どもたちの自己肯定感を高めたり学ぶことの楽しさを味わわせたりする取組を充実させる。そして、将来、ともに社会を担うパートナーとなることを子どもたちにも話していく。

[今後への活用:その他において]

中国の教職員の受け入れなど、積極的に交流を図っていく。

[中国との教育交流についての具体案]

- ・日本や本校のある地域の特色を活かした、合唱や合奏等の文化的な発表会。
- ・家庭科、体育や音楽や書写の授業などで、一緒に体験交流を行う。
- ・授業だけでなく、給食や掃除の様子の参観や体験。
- ・中国の教職員と児童の交流。

グローバルな視野をもった国際人になるために

星美学園小学校 中上 晴絵

私にとって初めての中国訪問。悠久の歴史や様々な文化に触れ、現代を生きる中国の方々との交流をし、多くのことを学ぶことができた。

今回のプログラムの中で強く印象に残るのは、桂

林や上海での学校訪問である。

まずは、どの学校でも私達の訪問を大変歓迎して下さったことがよく伝わり嬉しかった。桂林の小学校や聾啞学校では、学習の様子だけではなく、素晴らしい演技もたくさん見せていただいた。おそらく相当の時間をかけて練習されたのであろう。上海の中学校では、日本への関心、将来の夢など、子どもたちの生の声を聞けたことが大変良かった。しっかりと自己を表現し、高い目標をもって学んでいる様子がわかった。これは、日本の子どもたちに少々欠けている点ではないだろうか。

出発する日、飛行機の中で読んだ新聞に、日本の訪中団に語った習近平国家主席の言葉が掲載されていた。「民間での交流が大切である」と。共にアジアで生活する者同士として、文化を理解し合い、互いを尊重する心をもって生きていくことが、これからの未来のために大切であると強く感じた。

貴重な体験をさせていただけたこと、多くの方々にお世話になったことに、深く感謝する。

[今後への活用:学校において]

撮影した写真や動画、いただいた資料を用いて、中国の教育現場や町の様子について、伝えていく。見たことや体験したことを伝えることから始め、中国(に限らず他国についても同様)への視野を広げられるようにし、関心をもてるようにしていく。

[今後への活用:その他において]

自分自身の学びとして、中国についての知識を深める。

[中国との教育交流についての具体案]

- ・合唱、運動会でのダンスなどを披露し歓迎会を行う。
- ・日本の文化として、有志による、お琴の演奏、盆踊りなどを披露する。
- ・中国の先生方による授業(水墨画、簡単な中国語など)を体験させ、文化交流の場をもつ。
- ・児童との交流の場があるなら、一緒に遊ぶ体験をさせたい。

方は、日本の教育から学ぶということをよく口にされていたが、日本人教員も中国から学ぶことが多かった。一方、ホームレスや物乞いを見かけたように発展から取り残された人達も中国には存在していた。格差の問題は、日中両国に存在していると思う。

学校あげての熱烈歓迎を訪問先の学校で受けた。日本のアニメは中国でも人気だそうである。中国人の厚意や日本への関心をいたる所で感じた。その厚意や関心にどう応えるかは我々の課題でもある。桂林聾啞学校では、教師と生徒が学習活動に意欲的に取り組んでいる姿を見た。そのひたむきさは見習う所があった。そして中国も日本も若者は、感覚や考えは基本的に同じで通じ合える所はあると思った。日中の若い世代同士の交流を一教員として進めていきたいと思う。

[今後への活用:学校において]

まず授業で中国訪問について話をする。帰国直後の授業では、口頭での説明であったが中国について話をした。それでも中国に行ってみたいという生徒達もいた。授業では、もう一度パワーポイントを使って説明したい。

そして11月30日に予定されている中国から訪日する高校生の受け入れの準備を進めていきたい。具体的には中国について学ぶ授業を訪日団来校前に展開する。そして中国で受けた歓待を参考にどのように本校で中国からの高校生を歓迎するかを考えていきたい。

[今後への活用:その他において]

中国の方とのメールのやり取りをしたい。そこで得たものを生徒に伝える。

[中国との教育交流についての具体案]

JENESYS2.0の中国高校生訪日団の受け入れを11月30日に行うので、その準備を進めたい。

また、機会があれば中国からの教職員、生徒の受け入れを今後も積極的に実施をしたい。

また、市川市国際交流協会の日本語講座で学ぶ日本在住の中国人と交流することも検討したい。

中国から学ぶこと

千葉県立国分高等学校 大塚 雅信

中国は3年前に訪れたが、今回はその時よりもさらに発展している所を見た。IT教育や外国語教育などでは日本の学校よりも進んでいる面もあった。中国の

人生観の変化

市川中学校・市川高等学校 笹尾 弘之

今回の中国視察で、私の人生観を大きく変えた出来事を2つ紹介する。1つ目は、日本の感覚で世界の教育を考えてはいけないということだ。現在中国の

学生は、日本の高度経済成長期と同じく、良い学校で一生懸命勉強すれば、社会で成功できるというハングリー精神を持っている。だから学校での8時間授業や土日の塾通いは、勉強のやり過ぎ、詰め込み過ぎではなく、目標を達成するために当たり前にするべきことだということだ。

2つ目は、桂林の農村の様子である。「なぜ機械化せず、水牛を使った生産性の低い農業を行っているのか」という問いを現地の人に投げかけた。その答えは「機械化すれば農村部の人々は失業する。だから機械化はしていない。」だった。この言葉を聞き、地理教員としての農業への考え方が変わった。また都市部と地方の格差が拡大する原因の一つが、この考え方にあるのではないかも感じた。

以上の2点が、今回の中国視察で私の人生観を変えた出来事である。

[今後への活用:学校において]

今回の視察で、ニュースやメディア報道と違った中国の現状を知ることが出来た。私は地理教員として、教科書では分からない中国を紹介していく。その具体的な授業実践例を1つ紹介する。

中国は食材が豊富で料理が有名である。その中でも特に有名なものが、北京料理・四川料理・上海料理・広東料理である。その料理の写真を生徒に見せ、それを読み取ることで中国の気候と農業が理解できるという授業である。

まず、北京料理には米料理が少なく、小麦を使った料理が多い。これは、北京は降水量が少なく気温が低いため稲作に適さないことが関係している。稲作が可能な地域は、一般的には年降水量が1000mm以上の地域で、中国ではチンリン山脈-ホワイ川を結んだ線から南をいう。

次に上海料理は、魚介類が豊富である。写真ではその点に着目させる。しかし、今回の視察中に上海で食べた料理は特徴的なものは少なく一般的なものだったので、近年の上海という都会の食生活の変化が伺えた。

四川料理は、麻婆豆腐や回鍋肉など香辛料を使ったものが多い。なぜ香辛料を使い辛くするのかを生徒に問い、考えさせる。その答えは、四川が内陸に位置することや気温や湿度などを考えれば、腐りにくくすることや発汗作用による人々の体温低下などの目的であることが分かる。

南寧や桂林でも見られた広東料理は、日本の中華街などでもお馴染みだ。野菜や米、海産物など食材が特に豊富であることから、気温が高く降水量が多いことを読み取らせる。中国の南部は、米の二期作が

可能なほどの降水量と気温であることは、南寧の空港を降りた瞬間に理解できた。

このように、中国の習慣や食事から気候・農業を理解する授業が可能であり、今回の視察で得た知識や経験を踏まえ、地理の授業でそれを実践していく。

[今後への活用:その他において]

学校現場以外では、今回の中国視察で実感した「郷に入ったら郷に従え」という言葉だ。数か国の海外旅行、修学旅行経験はあったが、中国は初だった。初めは文化の違いを痛感したが、その一つ一つに国民性が関係していることが分かり、今回の教育視察で、物事を考える際の多角的な見方、正解のない世界の多様性の理解を様々な場面で伝えていく。

[中国との教育交流についての具体案]

本校は、中国上海に友好提携校がある。そのつながりをより一層深めるために、今回の中国視察で得た内容をもとに、生徒への中国文化や教育制度の紹介を行う。その理解が、生徒間の交流をより深めることとなるだろう。

さらに、今回一緒に視察を行った全国の教育関係者とのつながりも大切にし、他校ではどのような交流が行われているかを共有し、今後の中国との教育交流に生かしたいと思う。

肌で感じる国際理解教育

長崎市立桜馬場中学校 田嶋 修

中国に到着して感じたことは、中国の人々は「大声で話す」「いつも怒っている」など不満ばかりだった。数日間を過ごしていく中で、プログラムに参加をしていた先生が楽しそうに現地の方と話している姿を見ながら、ある言葉が思い出された。「国際理解教育は、まず相手をすべて受け入れることだ。」思い切って声を上げて自己主張してみようと、片言の英語や中国語で話しかけてみた。通訳も交えながら図々しくも多くの質問をぶつけてみた。するとどの訪問先でも誠意を持って回答をいただき有意義な交流となった。特に桂林市教育部の基礎教育課長様とは密な情報交換をさせていただいた。学校訪問にはすべて同行していただき、上海出発時には、早朝から見送りに来ていただいた。教育に携わる者として、また人としての熱い情熱を感じた。今回のプログラムでは中国の文化や国民性、教育を肌で感じることができた。長崎市は国際都市を目指し、国際理解教育を推進している。私が今回のプログラムを通じて肌で感じることができ

た国際理解の在り方を、言葉だけではなく行動や情熱、誠意を持って示していきたい。

[今後への活用:学校において]

6月末から受け入れが決まっている自治体職員交流事業(中山市教育局職員1名)について、教育という視点をベースに文化、芸術など多岐にわたり交流を深められるよう、計画の立案から実施まで中心となって取り組む。また、授業の補助や学校行事にも積極的に関わられるよう役割をつくり、日本の学校教育を体感してもらえるよう尽力する。

校内研修では、すでに報告会が予定されている。中国の教育の現状や国際理解について、今回のプログラムをもとに発表していきたい。また、機会があれば、校外での発表も行っていきたい。

[今後への活用:その他において]

長崎は中国との関係が深い都市であり、多くの中国人が観光に訪れたりする。交流事業も盛んであり、ボランティアとして関わることもできる。今後はこのような機会を生かし、多くの外国人とふれあう機会(ボランティア等として関わることを)につくっていききたい。

[中国との教育交流についての具体案]

本校は6月末から自治体職員交流事業(中山市教育局職員1名)の受け入れが決定している。週3回ほど本校で勤務していただき、授業の補助や学校行事に参加していただくことで交流を図っていききたい。また、互いの国の教育事情などの意見交換ができる機会をつくっていく。

上記とは別に、長崎市から国際理解教育のグループ研究の委託を受けている。計画は未定ではあるが、中山市の中学校と交流を進めていく計画である。具体的にはウェブカメラを通じて互いの生徒の交流ができるよう計画がすすんでいる。

交流を通して互いを知り、つながる

荒尾市教育委員会 上原 泰

中国を初めて訪れた私にとって、見聞きするもの全てが印象的であった。特に、中国という国の大きさと勢い。広い国土、そしてたくさんの人。市街地には近代的な建物が立ち並び、中国が経済的にも発展していることがわかった。その一方で、農村地帯では、牛などを使って農作業をしている様子が見られ、地域間の格差も感じることもできた。

教育に関しては、国を挙げて教育水準を向上させ、

国際競争力を高めていこうとする目的のもと、教育政策を進められていることを知った。広大な国土で、義務教育を法の制定から25年かけて全面普及させ、都市部と農村部の教育の格差是正を図っていることなどからも、国際化に向けて教育に力を入れていることを感じた。

また、訪問したどの学校でもしっかりとした教育方針の下で指導がなされており、授業や発表の様子からも、子どもたちが夢を持ち、その夢に向かって努力していることが伝わり、中国の未来を担う子どもたちが育っていると感じるとともに、日本の子どもたちに必要な姿がそこにあると感じた。

今回の中国訪問を通して、中国の文化や教育、人について知ることができた。そして、日本国内の各地からこのプログラムに参加した先生方との交流ができた。互いを知り、そしてつながっていくことが、国際交流の第一歩であると感じた。

[今後への活用:学校において]

本交流事業の一環として来年1月に中国教職員の訪問団を受け入れる予定となっている。その際にいくつかの学校で視察訪問や交流を計画していただくので、今回のプログラムを通して学んだことや感じたことを生かし、日本の教育の素晴らしさを感じてもらえる創意工夫した受け入れにしていきたいと考えている。その中で、子どもたちや教職員が、「中国」という国や人、歴史や文化に対する理解を深め、隣国の友人として、今後交流を深めていくきっかけを作っていく。

[今後への活用:その他において]

中国の各訪問先では、とてもこころよく歓迎していただいた。熊本県にも、中国から毎年多くの観光客が訪れている。市民レベルでの国際交流としては、やはり訪れた人たちに気持ちよくすごしてもらうことが一番であると思う。1月の中国教職員訪問団の受け入れに際して、日本人のおもてなしの心を感じていただけるよう準備をしていきたい。

また、実際に中国を訪れて感じた文化や習慣の違いなども、各種研修会で紹介するなど、日中友好、日本の教育の在り方を考える機会を作っていきたい。

[中国との教育交流についての具体案]

本市は、毎年中国からの訪問団を受け入れている。短い滞在期間ではあるが、市内の小学校、中学校、特別支援学校を訪問してもらい、授業の様子を見学したり、児童生徒や教職員と交流をしたりしている。その中では、子どもたちの授業に参加する活動や、逆に子どもたちに授業をしてもらう活動も企画しているし、日本と中国の教育事情について、訪問校の教

職員と中国からの訪問者で意見交換を行う場などを設けている。

また、本市には中国の革命家である「孫文」と親交が深かった「宮崎兄弟」の生家がある。そこを見学することで、歴史的にも中国とのつながりがあることを実感していただいている。

今後は、教職員同士の交流を通して、互いのつながりを深め、それが学校間の交流、子ども同士の交流へと発展していくように考えていきたい。

広大な国土と中央政府の統括

札幌市立北辰中学校 宇留間 準

自分自身が持っていた情報と事前の中国教育事情の学習から構築された予備知識は、中国教育部への表敬訪問によってほぼ一定の基本的な固定化がなされた。国際標準とされるコモンセンスと自国民の差異を確認している中央政府が、教育の重要性と有用性に期待を寄せる姿勢は容易に理解できる。国家の成立過程で国民全体の教育レベルの向上を平行的に実施できなかった歴史を短期間で修正するには相応の障害が出現し、解消のための相当の負担が生ずる。後進地域は中央政府の方針を忠実に実行するが、少数民族の伝統的文化の継承・保護には民族教育の常識的な中心事項が欠落していた。標準化政策そのものを甘受しない先進国際都市では、基本である年齢学制が統一されていない。このような状況下で日中相互の実質的な成果を上げるには一般的教育現場での交流に足場を築くことが肝要かと考える。

[今後への活用:学校において]

生徒・教職員への情報提供に努める。

[今後への活用:その他において]

求めに応じて情報提供に努めたい。

[中国との教育交流についての具体案]

自治体に関しては行政担当事務局に一任するが、対象校に選定された折には今回の経験を生かして対応したいと考える。学校単体としては、中国籍の生徒が常時在籍する実態があるため、取り立てての交流については企図していない。

B グループ

感謝・感謝

荒川区立尾久宮前小学校 伊藤 英夫

中国の教育事情を理解するよい機会になりました。教育者の一人として、何よりも現場の児童生徒と触れ合うことがありがたかったです。もし言葉がもつと流暢であれば、更に深い交流ができたのでしょうか。やはり言語力は大切であると感じました。

関係する方々に親切丁寧にご準備・ご指導いただいたことをまず感謝したいです。厚遇の日々について受け入れ側のご苦勞を忘れがちですが、たくさんの時間とエネルギーを費やして迎えてくださったことに感謝しています。もし来日する機会がありましたら、受け入れ側として精一杯おもてなしをしたいと考えています。

最後に今回偶然の出会いで同行したメンバーにも心から感謝しています。皆ご自分の教育観・理想像をお持ちで、視察を有意義に推進して下さったのが分かりました。

更に私個人の誕生日までお祝いしていただき恐縮しています。人生の1ページを飾るよい思い出になりました。ありがとうございました。

[今後への活用:学校において]

実施されたプログラムのプレゼンテーションを作成し、教職員・全校児童・保護者・評議員・校長会等に説明する。

[今後への活用:その他において]

教育課程に「多文化理解」を位置づけていく。本区は中国・韓国の方々が多数住んでいるし人口の流動も激しい。そうした地区だからこそ、情報を共有して理解を深め合う必要がある。

[中国との教育交流についての具体案]

教育委員会とも相談して、できることを考えたいと思います。

教育にかける熱き思い

荒尾市立荒尾第四中学校 早野 直美

最も有意義であったプログラムは、学校訪問である。まず、子どもたちの明るい笑顔と精一杯の演技、演奏で私達を迎えてくれ、感動と感謝で胸が一杯になった。実際に十分に整えられた学校環境や、自分の人生を成功させるために必死に学ぼうとする児童生徒の目の輝きを見て、中国が教育に力を入れていることがよくわかった。全教室に設置されたプロジェクターや、学習の成果を発表するステージなど十分すぎるほどの学校環境は、教育のためには惜しまないという中国政府の熱意が感じられた。ただ、教員の質も上がるようランク付けする取組には正直驚いた。それが、本人の意欲につながれば良い取組になると思うが、同じ取組は日本ではできないと感じた。しかし、それも教員としての責任であるとするならば、教員への向上心や質は明らかに負ける結果になるのかもしれない。私は評価されるためではなく、目の前にいる生徒のために同じくらい努力したいと感じた。

本プログラムは、国公立・私立学校からも先生方が参加されているので、日本の教育のあり方も見直すことができたことも有意義であった。所属は違うが、教育に熱く取組まれる話を伺うことができ、実り多き9日間となった。本事業を企画運営される方、また、中国で最高のおもてなしをしてくださった全ての方々に感謝します。

[今後への活用:学校において]

- ・今回の訪問で自分自身の中国へのイメージが大きく変わったことを具体的に職員に伝える。(学校訪問の様子や通訳・ガイドさんの温かみなど)
- ・道徳の授業などで、本事業の経験を紹介し、異文化について考え・理解する機会をつくる。
- ・全校朝礼や全校集会の時間を活用して中国の生徒の様子を伝える。

[今後への活用:その他において]

- ・訪問で頂いた記念品を校内に紹介するコーナーを設置する。
- ・学級通信を通して中国の文化や気づきを紹介し、保護者へ異文化を理解する啓発を行う。

[中国との教育交流についての具体案]

- ・教育交流が1月予定であることから、武道(柔道)の授業を参観。
- ・中国には家庭科の授業がないということだったので、家庭科や技術の授業参観。
- ・本校は掃除に力を入れているため、黙想からの無言清掃でぞうきんがけする姿をお見せしたい。
- ・日本の中学生との交流を直接行って欲しいので、中国の先生に授業をお願いしたり、互いに質問しあうような機会を設けたい。

「知る」ことから始まる交流の第一歩

長崎市立淵中学校 石隈 亨

私が勤務する長崎では、古くから中国との交流があり、生活そのものに中国の文化が深く関わっている。・・・と、私はこれまで出会った他県の方々に説明をしてきた。確かにこのことは事実であるが、本プログラムを終えて大きく私の中で気づき、変わったことがあった。最初に、私がイメージする中国はあくまでも長崎県の中の中国であり、隣国の中国ではなかったことである。中国の学校現場や街の風土、そしてそこで生活を営んでいる方々との交流は、私に良い刺激と変化をもたらしてくれた。二つ目に、もっと中国のことを、そして中国の人々を知りたいと感じたことである。私が今回のプログラムで知り得たことは、あの広大で懐の深い中国の、ほんのごくわずかな一部であることは今回の経験からも容易に想像ができたからである。

今回の訪問先の一つである、逸仙中学校(高校)で日本人教師と中国の学生が運動競技で競争をする場面があった。その時、私の耳にははっきりと中国の女子学生が大きな声で叫んでいたことばが聞こえた。「加油！日本！（がんばれ！にっぽん！）」これからも深く中国と関わっていきたいと思った瞬間であった。

[今後への活用:学校において]

貴重な体験だけに、周囲から中国の現状を聞いた声が多かった。その内容を伝達するべく、総合的な学習の時間を利用して、今回の訪中内容を全職員と全校生徒に伝える時間を確保していただいた。当初は掲示物での伝達になるかと思っていたが、やはり生の声で伝えたい気持ちもあっただけにうれしい流れになった。

長崎という土地柄、中国からの来客も多く、訪問を受ける機会が今後もあると思われる。その場面では今回の経験を生かし、誠意を持って日本の文化を伝え、友情を深めていきたいと考えている。

[今後への活用:その他において]

個人的なことになってしまうが、やはりもう一度、自分のペースで中国を訪ねてみたいと考えている。学校現場を訪問することは難しいと思うが、中国の文化や歴史を知る上では、今回のプログラムはよいきっかけになった。

中国に興味がありながらも二の足を踏んでいる職

員は多い。そのような職員にも積極的に中国を訪ねて、国際理解の基礎を培う機会にしてほしいとも願っている。

[中国との教育交流についての具体案]

前年度は、日本側による招へいで中国教職員を学校として受け入れた。その際には餅つきを体験してもらった。生徒と生徒の保護者も一緒になって餅つきを行った。時期にもよるが、準備期間があればこのようなことも可能である。

本校は中学校で唯一、被爆遺構がある学校である。今年度には小さな資料館も敷地内に整備されるので、その資料の閲覧も可能である。ただし、このことに関しては日中間でも微妙な問題であるため、無理強いにはできないことも理解している。もし、興味があればどうぞ、ぐらいでもいいのではないだろうか。原爆資料館には足を運ばずとも、ちょっとした資料が見られる場所でもある。そして平和教育という観点から、本校は他国との交流・平和の発信も行っている。中国と交流を深めることは、まさしく平和への第一歩となり得ることは、今回のプログラムに参加して確信した。ぜひ、日本への招へいプログラムがあった際は、登校生徒と交流を深めていただきたいと思っている。

本校には吹奏楽部があるので、歓迎の演奏はいつでも可能である。実際に歓迎演奏を行ったときは大変好評であった。

行って・見て・交流しわかること

長沼町立長沼舞鶴小学校 石丸 力

経済と同様、急速に進展する中国の教育、日中友好をととても大切に考えていることなど、事前研修で予備知識を持って訪中したが、まさに「百聞は一見に如かず」、小学校・中学校・高等学校・聾唖学校を訪問し意見交流をすることによって訪中前に持っていた中国の教育に対するイメージと理解が大きく変わった。

地方と都市との教育格差是正のため貧困な農村に勤務する教師に補助を出し教育環境改善を図る施策、個性を尊重し適正を伸ばすため国・省・地区レベルによる無償で行っているスペシャリストの派遣、「全ては生徒のために、常に未来を見つめて」という理念のもと機能回復と職業技術訓練を指導の重点として取り組んでいる全日制特別支援教育寄宿制学校、熱烈に歓迎し質問に対して真摯に回答をくださった訪問先、昼夜を問わず対応してくださった通訳そして教育関係者・・・等々、学び感じるものがたくさんあり、また、

日本の訪問団を大切にしてくださっていることを強く感じた。大変素晴らしいこのプログラムがさらに拡充発展することを願っている。

[今後への活用:学校において]

校内研修において中国の教育情勢と訪問先の取組について報告をし、地域や本校の実情をふまえ取組等可能な先進事例については次年度の課題とする。

[今後への活用:その他において]

私自身、訪問前に抱いていた中国の教育についてのイメージが間違いであったことに気づいた。町の教育委員会や校長会に見聞したことを正確に伝えていく。

[中国との教育交流についての具体案]

本校の所在する自治体は、既に他国都市との交流事業を行っており自治体の規模等から中国との教育交流は難しい。また、本校はへき地複式の小規模校であることから今回訪問した都市大規模校との交流は同様に難しい。

切磋琢磨し合うアジアの良き友として

筑波大学附属中学校 小林 美礼

中国の教育関係の方々と交流する有意義な体験をさせていただき、私にとって中国が大変身近なリアリティのある国となった。

社会の体制が我が国とは異なり、義務教育が整備されて間もない中国だが、学校ごとに国家の指導目標に根ざした特色のある教育が展開されており、それを外部に強くアピールする力があることに圧倒された。

また、どの学校も自校の歴史や伝統に誇りを持ち、目指す児童生徒像を具現化するための教育活動を積極的に行っていた。そして我が国と同様に、知育のみならず、徳育・体育・芸術など、バランスのとれた教育が実践されていた。このような取り組みから、人を育てることや子ども達の笑顔に国境のないことも実感した。

さらに、著しい経済発展と同様に、教育に関しても各先進国の様々な制度や内容を取り入れ、都市部のみならず、地方においても、スピード感を持って着実に整備が進められていると思われる。グローバル人材の育成にも重きを置いており、成熟した国家へ変貌を遂げようと、教師も子ども達も強い向上心のもと

努力をしている。

今後は中国と共に、共存する多様性を基盤とし、国籍、性別、障害等乗り越え、その先にある豊かな繋がりを育むため、自らの職責を通して具体的な一歩を踏み出していきたい。中国には、謙虚にその良さを学び、これからも切磋琢磨し合うアジアの良き友として、絆を深めていきたい。

[今後への活用:学校において]

- ・国際理解教育・グローバル教育において、まず相手国に偏見無く違いを受け入れることの大切さを、生徒に折に触れ伝えていきたいと強く思った。また、教職員や生徒に、中国の子ども達の学校生活を具体的に伝えていきたい。今の日本では失われつつある中国のハングリー精神や、努力の大切さなど。
- ・教員の校内研修会で、今回の成果を発表する。
- ・教員免許状更新講習の会場校なので、受講の先生方にグローバル教育の一環で、中国の教育事情を紹介する。
- ・教育実習生に中国の教育事情や国際理解教育の実際について話す。

[今後への活用:その他において]

- ・身近な異業種の友人や、家族に中国の良さを伝えていきたい。
- ・(国際連合大学大学院事務局長の)岩佐さんがおっしゃった、「中国をひとくくりで見ないで欲しい」という言葉が印象的である。その通りであると思うので、周囲に伝えていきたい。

[中国との教育交流についての具体案]

- ・教員向け:
学校紹介、授業の公開、施設の案内(和室・お茶室の紹介含む)、質疑応答(教育内容に踏み込んだディスカッション可能)など。
- ・児童生徒向け:
生徒会による歓迎会、授業参加、昼食お弁当配布、和食の説明、
日本文化の紹介、施設の案内(和室・お茶室の紹介)など。

日中友好の懸け橋の重要性と日本の教育が中国に学ぶべきところ

東京都立向丘高等学校 島岡 恵一

2015年の5月末に中国を訪問することの意義はとても大きい。日本で報道されている日中情勢を念頭

において、今回の訪中時のいろいろな事象や体験を通して考察していったときに、私自身のやるべきことは何かと改めて考えさせられた。草の根交流を地道に行っていくことや、この事業の継続・発展を願い協力していくのは参加者のみならず、数多くの関係者全員が考えることであろう。我々の使命は日中の懸け橋になることである。どんな小さなことでもいい。自分のできる範囲で、無理のないように継続して行えるようにすることが重要である。

次に日本国内の教育の足元をよく見てほしい。5年先、10年先の知識基盤社会を見据えた教育をシステムとして行っているかどうか。硬直した縦割り行政に縛られ、目先の大量の仕事に追われているだけではないだろうか。インターネット技術の理解をはじめとした情報分野の人材育成のシステム化を従来以上に推進し、すぐにでも制度化し実践しなければならないであろう。この危機感をどのようにして教育の方向性を決断できる方々に伝えるかを思案中である。

[今後への活用:学校において]

中国訪問の教員対象の報告会を実施するのみならず、あらゆる場面で今回体験したことなどについて情報を共有化する。また、次年度以降この事業での受け入れ協力を行うことを学校全体にお願いしていく。生徒への報告会を行い、中国の生徒の学習している内容や世界に視野を広げて日々勉強していることなど、伝える予定である。

[今後への活用:その他において]

個人的なメールのやり取りを通じてのコミュニケーションを継続して行う。また、帰国翌日に東部学校経営支援センター所長及び東部支所課長に私の思い(日中友好関係の草の根交流の大切さと日本の進学校における情報教育の充実を至急行う必要性)を校長を通じて報告した。

[中国との教育交流についての具体案]

昨年秋に中国教職員の訪日団が来ていただいたときのような対応は可能である。午前もしくは午後の3時間程度の学校見学で、意見交換、授業見学等であれば問題ない。管理職の同意も得ている。日本(東京)の学力レベルが中程度(標準的な)の公立高校の様子をありのままに公開することはそれなりの意義があるであろう。

芸術教育と子どもの数

栗山町教育委員会 清水 一徳

訪問した全ての学校は、選ばれた学校であるが、それに応えるべく、子どもたち、教師、環境と、いずれも素晴らしい学校でした。子どもたちの芸術教育とされる、美術、書道、踊り、演奏、スポーツ等を目のあたりにすると、非常に高度であり、ここに至るまでの日々の努力が伺えます。日本の子どもたちの、携帯ゲーム等の姿を重ね合わせると、はたして日本の子どもたちは、中国の子どもたちより、精神力が強く、忍耐力、集中力があるのか不安に感じるところもありました。学習においても社会に出てからも、健康と気持ちが最後は一番大切になることから、中国の子どもたちのたくましさを感じ、将来が楽しみです。

また、子どもたちがたくさんいて、本当に羨ましく、少子化が叫ばれる日本において、特に地方では見ることが出来ない光景でありました。当町においては、統合、複式と将来、中学校は既に1校ですが、小学校も1校となってしまう可能性があり、地域の賑わいが消えていきそうです。今、当町も若者世代の移住に重点をおいています。子どもは町の宝であり、地域活性化の大きな力となります。私も町の施策に積極的に参加していきたいと考えました。

[今後への活用:その他において]

私は、教職員ではないので、校長会、教頭会を通じ、この度研修したことの全てを全ての学校に情報発信してまいりたいと考えています。やはり、中国には風評被害的なイメージがあります。けっして日本で報道されている内容ばかりでなく、礼儀を重んじ、恩を忘れず、自信を持ち、また、意外と空気もきれいで、広大で、魅力ある国であることを伝え、中国のイメージの回復にも努めていきたいと考えています。

また、この度の研修で友好を深めた参加者と、今後も情報共有しながら、それぞれの教育現場で活かせるような関係を継続していきたいと思えます。

[中国との教育交流についての具体案]

当町は、「ふるさととは栗山です。」を合言葉に町づくりを推進しています。これに伴い、教育委員会では、自然環境教育に大きな重点をおいています。

廃校の学校では、全道で2校しかない木造2階建ての校舎を拠点に、学校向けに作成した自然体験プログラムを基に、豊富な自然体験メニューを学校側が選んで子どもたちが体験する事業を行っています。事業費は「ふるさと体験教育」交付金として町側が予

算を組み、栗山の子どもたちのみんなが、無料で体験ができ、宿泊できます。昼食は、給食も搬入されません。ただし、朝、夕食はいずれもバイキングで保護者負担となります。2食で800円程度です。宿泊をしないで、プログラム体験だけでも含めると、延べ2,393名の子どもたちが利用しています。

プログラムの一例:ボート夕張川下り、釣り・水生生物調べ(釣った魚は焼いて食べます)、野外炊飯、ナイトハイク、ピザ窯ピザ作り、クラフト体験等々。冬はイグルー作り(かまくら風)、ドラム缶風呂、雪中運動会等となっています。

この学校の宿泊のマックスは80名となっています。学校は中規模中学校1校、中規模小学校1校、小規模小学校2校となっています。現在は、都会ではあたりまえとなっているタブレットを用いた授業も行い、さらに地域に根ざし、地域住民も参加する土曜授業を小規模小学校において実施しています。

実施の可能性につきましては、人数によるところが要因となると思いますが、当町で行っている自然体験教育を通して、中国の学校と交流を行いたいと考えています。

「鳥の目視点と蟻の目視点でみた中国の教育事情」

多摩市教育委員会 下条 知淑

初めて中華人民共和国を訪問する者として真っ先に思い浮かんだのは、共産党一党独裁による社会体制のなか、公教育がどのように展開されているのかという疑問であった。今回の中国訪問をとおして感じたことは、教育とは結局のところ教師と児童・生徒、また児童・生徒同士のコミュニケーションがその根本であり、資本主義国である日本と比較しても中国の教育は通じることが多々あるということであった。

先輩教師から聞いた言葉として、「鳥の目蟻の目でみる」というのがあった。「鳥の目で全体を俯瞰して指導する」「蟻の目で児童・生徒一人ひとりに寄り添い指導する」、この両方の視点をもちながら指導に当たることが重要であるということである。

中国の教育事情は、鳥の目で見ると日本との差異が目につくが、個々の児童・生徒レベルで見ると、教師と児童・生徒と授業としての営みに大きな差異はみられなかった。むしろ中国の先生方の熱意と、児童・生徒の教育に関する意欲の高まりについて、日

本も学ぶべきことが多々あった。

[今後への活用:その他において]

教育行政の立場からは、「自己肯定感を高めるための取り組み」「学力向上」「授業規律の保持」等について、各学校に指導する際の根拠資料や引用元として活用していく。

[中国との教育交流についての具体案]

- ・教職員団の受け入れ
- ・ICT 機器を活用した遠隔地交流

今後も交流を

立教新座中学校・高等学校 玉井 智子

今回このプログラムに参加して中国に抱いていた画一的な印象が薄れました。中国を訪れる前まではニュースなどの影響もあり、中国とは画一的な国で教育もそうではないかと思っていたのですが、実際に教育庁の方にお話を伺ったり、各学校を訪問し児童生徒の皆さんや教職員の方々と交流したりすることにより、その印象を薄めることができました。生徒はのびのびと学校生活を送っており、先生方も児童生徒一人ひとりの素質を伸ばそうと非常に熱心でした。国や地域も教育の質の向上と均衡化を目指しさまざまな施策を行っており、教育に非常に力を入れていることが感じられました。町中で接した中国の人々もみな親切で、ニュースで見ているような反日感情に触れる機会はありませんでした。

この訪問を通して、その土地に赴き人々とじかに触れ合い交流することの大切さを実感しました。一人でも多くの人が互いに理解し合う機会を持てるように、このような事業が今後とも続けられることが重要だと感じました。

[今後への活用:学校において]

- ・生徒向けに中国の文化紹介。
- ・教職員には報告会、もしくは広報誌にて報告する予定。

[今後への活用:その他において]

周りの人々に、より中国を身近に親しみを持ってもらえるように今回の経験を伝えたい。

[中国との教育交流についての具体案]

学校訪問などは常時受入可能かと思います。高校3年の選択授業で中国語を選択している生徒もいる

のでスカイプなどでも良いので直接接する機会が持てたら良いかと思います。(詳細は担当教諭による)

中国教育から学ぶべきこと

千葉県立流山おおたかの森高等学校

薄葉 みわ子

中国の教育で学ぶべきこと1つに、生徒の興味関心・長所を積極的に伸ばす環境がそろっていることが挙げられるだろう。例えば長所と言えば、学力が高い生徒や芸術やスポーツ面で秀でている生徒を紹介する大きな掲示物が訪問した小中高等学校全てにあった。また、小学校の国語の授業では、音読は教師に続いてではなく、音読が得意な生徒が机間巡視をしながらミニ先生として指導にあたっていた。興味関心の面でも、習字の授業を見学した際、文字を練習している生徒もいれば、水墨画を描いている生徒もおり、自分のやりたいことを自分たちで考え自由に活動できる環境が整っていることに魅力を感じた。生徒全員が同じ方向を見て、協力し合いながら確実に学んでいくのが日本の教育であれば、自分自身を見つめ、力をそれぞれに伸ばし、仲間と刺激し合いながら学んでいくというのが今回訪問して持った私の中国の教育の印象である。

[今後への活用:学校において]

・授業での紹介:

1年コミュニケーション基礎・3年コミュニケーション活動Ⅱにて、中国に関することや自分が体験した内容などを紹介する。

・教員への発表:

英語教員へー 訪問校の授業の様子や教員同士の交流で学んだことなどの情報共有など)

中国語教員へー 現地で集めた教材(絵本やパンフレットなど)や写真等を渡し、必要であれば、授業に参加し、体験したことを授業で紹介する機会を設ける。

[中国との教育交流についての具体案]

中国教員視察の受け入れ:

今回私たちが訪問した学校のように、中国の教員の授業見学などの受け入れができると思う。本校では、英語教育に力を入れて取り組んでいるので、ぜひ英語指導の現場を見ていただき、協議する時間をいただけたらと思う。

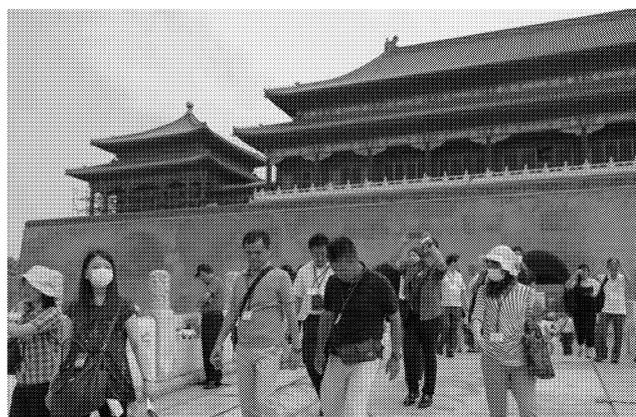
◆付録. プログラム写真



北京首都国際空港の前で記念撮影



事前オリエンテーションにて国際連合大学大学院岩佐敬昭事務局長よりあいさつ(東京都・ホテルビスタ蒲田)



故宮博物院・天安門見学(北京市)



中国教育部への表敬訪問(北京市)



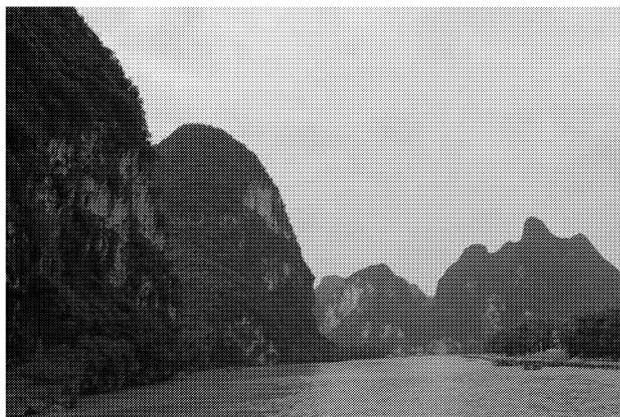
中国教育部で出迎えてくれた方々(左から: 栄雷氏、白剛氏、陳盈暉氏)



広西チワン族自治区教育厅への表敬訪問(南寧市)



広西チワン族自治区教育厅との記念品交換(左:副団長の伊藤英夫氏、右:副庁長の蔡昌卓氏)



自然がつくり出した絶景(桂林市・漓江下り)



書道部の活動を見学(桂林市逸仙中学)



生徒たちとムカデ競走をする参加者(桂林市逸仙中学)



全校児童が体操を披露して歓迎(桂林市榕湖小学)



チワン族の民族舞踊を披露してくれた児童たち(桂林市榕湖小学)



書道の先生より書のプレゼント(桂林市榕湖小学)



お礼に中国語の歌を披露する訪問団(桂林市榕湖小学)



学校の見取り図を囲み、程斌校長の説明を聞く参加者(桂林市聾哑学校)



職業訓練教育(製菓)の授業(桂林市聾哑学校)



職業訓練教育(理美容)の授業(桂林市聾哑学校)



歓迎会でダンスを披露する生徒たち(桂林市聾哑学校)



教員との意見交換(上海市進才实验中学)



オーケストラの練習風景(上海市進才实验中学)



中華芸術宮の前で記念撮影(上海市)

◆資料1

国際連合大学

2014-2015年 国際教育交流事業

中国政府日本教職員招へいプログラム

(2015年5月24日(日)-5月31日(日): 中国/北京市、広西チワン族自治区、上海市)

実施要項

1. 背景

国際連合大学は公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター(ACCU)を委託機関として、「国際教育交流事業」のひとつとして、中国から初等中等教育教職員を招へいするプログラムを実施してきました。2002年より開始されたこのプログラムにより、これまで1,490名の教職員が日本を訪問し、我が国の教職員との交流を深め、日中両国間の相互理解と友好の促進に貢献してきました。

2003年からは上記プログラムと対をなすものとして、日本の教職員10名を中国へ派遣してきましたが、これら交流事業の成果が中国政府に評価され、日中国交正常化35周年を記念する2007年からは中国政府教育部による招へいプログラムとして実施され、さらなる交流の発展を目指すこととなりました。

2. 目的

- (1) 中国の教育制度および教育課題への理解を深め、成果を学校・地域の教育活動に還元すること
- (2) 教育現場での交流・意見交換を通し、日中教職員間の持続的な相互交流を育み、日中両国の教育の質を高めること
- (3) 中国の文化全般への理解を深めること
- (4) 日中両国の相互理解と友好を促進すること

3. 活動内容

- (1) 中国の教育政策の現状と課題についての研修
- (2) 中国の教職員および児童生徒との、教育現場での交流
- (3) 学校および教育・文化施設の視察

4. 日程

出発前オリエンテーション:2015年5月23日(土)

プログラム実施期間:2015年5月24日(日)-5月31日(日)(8日間)

日付	日程	訪問先	活動
5月23日(土)	前日(午後)	東京	出発前オリエンテーション
5月24日(日)	派遣第1日目	北京市	東京(羽田空港)出発 北京首都国際空港到着
5月25日(月)	派遣第2日目	北京市 広西チワン族自治区	中国教育部表敬訪問 訪問先自治体の教育委員会表敬訪問 学校訪問
5月30日(土)	派遣第7日目	上海市	教育・文化施設等見学
5月31日(日)	派遣第8日目		上海出発(成田、関西、福岡へ) 日本の各地へ到着

注:訪問先、活動内容については変更の可能性があります。スケジュールの詳細は追って通知します。

5. 参加者

下記の教職員、随行員、計25名程度の参加とする。

- (1) 2013-2014 および 2014-2015 年中国教職員招へいプログラムの受入れ教育委員会または受入れ校が推薦する教職員
- (2) 2015-2016 年中国教職員招へいプログラム受入れ予定の教育委員会が推薦する教職員
- (3) 日中間の教職員交流に高い関心を持つ自治体または学校の教職員
- (4) 国際連合大学、文部科学省、ACCU の職員

◆資料1

国際連合大学

2014-2015年 国際教育交流事業

6. 参加資格

- (1) 日本国民であること。
- (2) 所属する教育長・学校長等から推薦を受けた、初等中等教育教職員(教育行政職員を含む)であること。特に、在職3年～15年程度の教員が望ましい。
- (3) 将来にわたり中国との具体的な教育交流の推進に寄与できること。特に、中国との学校／教員／児童生徒／地域間の各交流、または定期的な情報交換等を推進する立場にある者が望ましい。
- (4) 健康で、オリエンテーションを含めたプログラムの全日程に参加が可能であること。
- (5) 団体行動の規律を守り、主体性を持って積極的に参加ができること。

7. 評価と報告

参加者は、プログラム終了後、所定の報告用紙により ACCU に報告書を2回提出する。

* 第1回参加者報告書提出期限: **6月12日(金)12:00**、第2回参加者報告書提出期限: **11月18日(水)12:00**

8. 渡航費等諸経費

- (1) 中国政府が下記について負担する。
 - 中国国内の移動に要する交通費
 - 中国滞在中の宿泊
 - 中国滞在中の食事 * 中国政府から日当は支払われませんが、中国滞在中の食事が手配されます。
 - プログラムの運営に必要な経費(通訳等)
- (2) ACCU が下記について負担する。
 - 日本(往路:羽田空港、復路:成田・関西・福岡空港のうち最寄り空港)と指定された中国の国際空港間のエコノミークラス航空券
 - 日本国内交通費:オリエンテーション日の会場までの交通費および帰国日の到着空港からの交通費の定額(ACCUの規定に準ずる)
 - オリエンテーション当日(5月23日)の宿泊が必要な場合には、日当の定額および宿泊
 - 帰国日(5月31日)の日当の定額(ACCUの規定に準ずる)

注1: オリエンテーション当日、開始までに到着可能な交通手段がない場合に限り、ACCUが前日の宿泊(手配と経費負担)および日当を負担します。

注2: 帰国日中に居住地に到着可能な交通手段がない場合に限り、ACCUが当日の宿泊および日当を負担します。
- (3) 各参加者の負担
 - 海外旅行保険料:プログラム期間中の万一の事故に備え、出発前に必ず各自の責任において加入しておくこと。
 - 上記(1)、(2)以外の諸経費
- (4) 旅券と査証について
 - 旅券(パスポート):入国時に1ヶ月以上有効なパスポートを各自で準備すること。
 - 査証(ビザ):一般旅券の場合は、ビザの取得は不要。

9. 通訳

プログラム期間中は、日本語-中国語間の通訳を配置する。

10. このプログラムに関する照会先

公益財団法人 ユネスコ・アジア文化センター(ACCU) 人物交流部
〒162-8484 東京都新宿区袋町6番地 日本出版会館
TEL: 03-3269-4498/4435 FAX: 03-3269-4510
E-mail: accu-exchange_ml@accu.or.jp

◆資料 2

国際連合大学
2014-2015年 国際教育交流事業
中国政府日本教職員招へいプログラム

日程表

日付	時間	予定	フライト・ホテル
5/23 (土)	13:10-13:30	オリエンテーション受付	ホテルビスタ蒲田 東京都大田区西蒲田 8-20-11 Tel: 03-5703-5555
	13:30-17:30	オリエンテーション	
	17:30-18:00	ホテルチェックイン	
	18:00-20:00	懇親会、終了後解散	
5/24 (日)	5:50	チェックアウト後ロビー集合、出発	CA184 8:30 羽田 - 11:20 北京 北京西西友谊酒店 北京西单北大街 109 号 Tel: 010-59319898
	6:30	搭乗チェックイン CA184	
	11:20	北京到着	
	13:00-14:00	昼食	
	15:00-17:00	故宮博物院・天安門見学	
	17:00	ホテルチェックイン	
5/25 (月)	9:00	ホテル出発 服装：ビジネス	南宁景都国际大酒店 南宁市青秀区茶花园路 31-1 号 Tel: 0771-2280888
	09:30-11:00	中国教育部表敬訪問	
	11:30-13:00	教育部歓迎会（老北平食府）	
	13:00-13:30	チェックアウト 服装：カジュアル	
	14:45-16:30	天壇見学	
	19:10-22:50	北京 - 南寧 (HU7776)	
		ホテルチェックイン	
5/26 (火)	9:00	ホテル出発 服装：ビジネス	桂林金龙珠酒店 桂林市叠彩区龙珠路 1 号 Tel: 0773-2833300
	9:30-11:30	広西チワン族自治区教育庁表敬訪問	
	12:30-18:40	桂林に向けて出発	
	19:10-21:30	桂林市教育局歓迎会	

◆資料 2

日付	時間	予定	フライト・ホテル
5/27 (水)	8:20	ホテル出発	桂林金龙珠酒店 桂林市叠彩区龙珠路 1 号 Tel: 0773-2833300
	9:30-12:00	漓江下り (船)	
	13:30-15:00	バスにて桂林に戻る	
	15:30-18:00	逸仙中学 (高校) 訪問	
5/28 (木)	9:00-11:30	榕湖小学訪問	
	15:00-17:00	桂林市聾哑学校訪問	
5/29 (金)	7:35-9:50	桂林ー上海 (FM9382)	青松城大酒店 上海市东安路 8 号 Tel: 021-64433888
	12:00	ホテルにて昼食	
	14:00-16:00	進才実験中学 (中学) 訪問	
	16:30-17:30	外灘見学	
5/30 (土)	9:30	ホテル出発	
	10:00-11:30	中華芸術宮見学	
	13:30-17:30	上海博物館・豫園見学	
	19:00	ホテル到着	
5/31 (日)	6:45	ホテルチェックアウト	CA929 10:00 上海ー13:50 成田 12:10 上海ー14:40 福岡
	8:00	上海浦東空港到着 (CA929 CA915)	

【中国側随行者】

北京:

中国教育国際交流協会 職業教育訓練部

王鉄輝

南寧・桂林・上海:

中国教育国際交流協会 国際合作部

徐穎

上海:

上海教育国際交流協会

陳琮

陳磊

◆ 資料3 参加者・関係者リスト

1. 参加者(20名)

Aグループ

A-01	北山 ひと美	KITAYAMA Hitomi	和光小学校	校長	東京都
A-02	シャオリ 由希子	CHAOULI Yukiko	長崎市立江平中学校	教諭	長崎県
A-03	早川 功	HAYAKAWA Isao	多摩市立落合中学校	教諭	東京都
A-04	古閑 悦子	KOGA Etsuko	荒尾市立万田小学校	教諭	熊本県
A-05	中上 晴絵	NAKAGAMI Harue	星美学園小学校	教諭	東京都
A-06	大塚 雅信	OTSUKA Masanobu	千葉県立国分高等学校	教諭	千葉県
A-07	笹尾 弘之	SASAO Hiroyuki	市川中学校・市川高等学校	専任教諭	千葉県
A-08	田嶋 修	TAJIMA Osamu	長崎市立桜馬場中学校	主幹教諭	長崎県
A-09	上原 泰	UEHARA Yasushi	荒尾市教育委員会	指導主事	熊本県
A-10	宇留間 準	URUMA Hitoshi	札幌市立北辰中学校	校長	北海道

Bグループ

B-01	伊藤 英夫	ITO Hideo	荒川区立尾久宮前小学校	校長	東京都
B-02	早野 直美	HAYANO Naomi	荒尾市立荒尾第四中学校	教諭	熊本県
B-03	石隈 亨	ISHIKUMA Tohru	長崎市立淵中学校	教諭	長崎県
B-04	石丸 力	ISHIMARU Tsutomu	長沼町立長沼舞鶴小学校	校長	北海道
B-05	小林 美礼	KOBAYASHI Mirei	筑波大学附属中学校	教務主幹	東京都
B-06	島岡 恵一	SHIMAOKA Keiichi	東京都立向丘高等学校	主幹教諭	東京都
B-07	清水 一徳	SHIMIZU Kazunori	栗山町教育委員会	教育次長	北海道
B-08	下条 知淑	SHIMOJO Tomoyoshi	多摩市教育委員会	指導主事	東京都
B-09	玉井 智子	TAMAI Tomoko	立教新座中学校・高等学校	司書教諭	埼玉県
B-10	薄葉 みわ子	USUBA Miwako	千葉県立流山おおたかの森高等学校	教諭	千葉県

2. 主催者代表

A-12	岩佐 敬昭	IWASA Takaaki	国際連合大学	大学院 事務局長	東京都
------	-------	---------------	--------	----------	-----

3. 日本側機関

A-11	美濃 亮	MINO Ryo	文部科学省初等中等教育局教育課程課	課長補佐	東京都
B-11	森 祐介	MORI Yusuke	文部科学省大臣官房国際課	調査係長	東京都
A-13	米島 百合子	YONESHIMA Yuriko	公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター	人物交流部部長	東京都
B-12	有蘭 佳子	ARIZONO Yoshiko	公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター	人物交流部職員	東京都

4. オリエンテーション参加者

新井 聡	ARAI Satoshi	文部科学省 生涯学習政策局参事官付	専門職	東京都
町田 恵理子	MACHIDA Eriko	大田区立大森第六中学校	教諭	東京都
藤野 明彦	FUJINO Akihiko	東京都立杉並総合高等学校	主任教諭	東京都

富本 ひろみ	FUMOTO Hiromi	公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター	人物交流部職員	東京都
--------	---------------	----------------------	---------	-----

5. 中国側機関

白 剛	BAI Gang	中華人民共和国駐日本国大使館	公使参事官	東京都
陳 盈暉	CHEN Yinghui	中国教育部国際合作交流司	副司長	北京市
蔡 昌卓	CAI Changzhuo	広西チワン族自治区教育厅	副庁長	南寧市
鐘 平	ZHONG Ping	桂林市教育局	局長	桂林市

◆ 資料 4

過去のプログラム実績

実施期間	開催地	訪問人数
2003年3月2日～8日	北京市、浙江省杭州市、上海市	12名
2004年4月25日～5月2日	北京市、天津市、遼寧省大連市	15名
2005年5月22日～29日	北京市、新疆ウイグル自治区烏魯木齊市、上海市	14名
2006年5月21日～28日	陝西省西安市、天津市、北京市	14名
2007年5月20日～27日	北京市、海南省(海口市、三亜市)、上海市	22名
2008年6月15日～22日	北京市、青海省、上海市	22名
2009年6月21日～28日	北京市、内モン自治区(呼和浩特市、包頭市)、上海市	25名
2010年5月30日～6月6日	北京市、貴州省貴陽市、上海市	23名
2011年5月29日～6月5日	北京市、湖南省長沙市、上海市	25名
2012年5月27日～6月3日	北京市、内モン自治区呼和浩特市	25名
2013年6月23日～29日	北京市、甘肅省蘭州市	25名
2014年5月18日～25日	北京市、貴州省貴陽市、上海市	50名 2012-2013年枠:21名 2013-2014年枠:29名
2015年5月24日～31日	北京市、広西チワン族自治区(南寧市、桂林市)、 上海市	25名

計 297名

●国際連合大学 2014-2015 年国際教育交流事業●

中国政府日本教職員招へいプログラム

実施報告書

2015 年 7 月

編集・発行

国際連合大学[UNU]

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター[ACCU]

〒162-8484

東京都新宿区袋町 6 番地 日本出版会館

電話 (03) 3269-4498

Email exchange@accu.or.jp

URL <http://www.accu.or.jp>

Printed in Japan by Wako Inc. [130]

©2015 Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU)